

岡山県邑久郡邑久町

大橋貝塚発掘調査報告書

——長谷川県営砂防工事に伴う調査——

1979.3

邑久町教育委員会

序

豊かで美しい自然に恵まれたわが邑久町は、弥生時代に邑久の平野が現出しておりますが、遺跡の出土品から見ますと、人々の活躍はそれに先立ち縄文時代早期からその痕跡を認めることができます。昭和42年、文化財保護委員会が作成した「全国遺跡地図」によりますと、本町には28基の貝塚が確認されています。大橋貝塚と門田貝塚はその代表で、著名な遺跡として人々によく知られています。

昭和51年、降雨によって未曾有の水害を受けた本町は、その復旧事業が各地で盛んにおこなわれました。大橋貝塚の東縁辺の長谷川も荒廃、砂防工事が昭和52年10月に着工されました。この地帯は貴重な埋蔵文化財の宝庫であり、工事施行にあたっては、事業主体者と十分な協議を進めてまいりましたが、不幸にして、大橋貝塚の一部については記録保存のための発掘調査が実施されました。

このたび、調査結果が『岡山県埋蔵文化財報告9』の中に集録されて岡山県教育委員会から刊行されましたが、より多くの人々に調査の成果を知っていただき、大橋貝塚についての認識を深めていただきたく、県教育委員会の了解のもとに抜刷して本報告書を刊行いたしました。この報告書を文化財保護にご活用いただければ有難いことだと存じます。

調査にあたっての地元の方々のご理解・ご協力に対し厚く感謝の意を表しますとともに、県教育委員会のご配慮に対しても深謝します。

昭和54年3月

邑久町教育委員会

教育長 宇津木 助 雄

例 言

1. これは、県営の長谷川砂防工事に伴い、岡山県教育委員会が実施した、邑久郡邑久町豊原大橋に所在する大橋貝塚の発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は昭和53年6月26日から同年7月6日まで実施した。現地調査は文化課職員岡本寛久が担当した。経費については岡山県土木部が負担した。
3. 挿図中の高度値はすべて海拔高である。
4. 挿図中の方位は、第1図、第2図は真北、それ以外は磁北である。
5. 実測図の縮尺はすべて表示している。遺物実測図ならびに土器図版は第16図を除き $\frac{1}{2}$ に統一している。
6. 出土した人骨ならびに獣骨については、京都大学理学部人類学研究室 教授 池田次郎氏、同部地質学鉱物学教室 石田克氏より玉稿を賜った。第5章として収載している。
7. 出土遺物の整理にあたっては、坪井和江、山尾真由美、細川早苗の三氏を預した。拓本は坪井、細川の両氏、石器の実測、淨写は行田裕美氏、平井典子氏のご協力を得た。また遺物写真は文化課井上弘の撮影である。
8. この報告の作成、編集、執筆は岡本が担当した。なお、本報告の作成・執筆中全般に渡り文化課平井勝の教示を得た。
9. この報告に掲載した地図のうち、第1図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2,500分の1地形図を $\frac{1}{2}$ に縮尺複製したものである。(承認番号)昭54中復、58号
10. 出土した遺物および実測図、写真類はすべて岡山市西古松文化課分室に保管している。

目 次

第1章 遺跡の地理的、歴史的環境	85
第2章 調査の経過	88
第1節 調査に至る経過	88
第2節 調査の実施	89
第3章 調査の概要	92
第1節 地形、層位	92
第2節 人骨	94
第3節 遺物	96
A. 土器	96
B. 石器	105
第4章 ま と め	107
第5章 大橋貝塚出土人骨、獣骨の鑑定	110
第1節 大橋貝塚出土の人骨について	110
第2節 大橋貝塚出土の獣骨について	116

図 目 次

第1図 遺跡位置図 (S = 1/50000)	87
第2図 遺跡周辺地形図 (S = 1/7500)	89
第3図 発掘調査区位置図 (S = 1/800)	90
第4図 発掘区全体図 (S = 1/120)	92
第5図 発掘調査区西壁断面土層図 (S = 1/80)	93
第6図 人骨出土状態 (S = 1/10)	95
第7図 出土遺物(1) 貝層下砂層出土土器 (S = 1/2)	97
第8図 出土遺物(2) 貝層出土土器 (S = 1/2)	98
第9図 出土遺物(3) 貝層出土土器 (S = 1/2)	99
第10図 出土遺物(4) 貝層出土土器 (S = 1/2)	100
第11図 出土遺物(5) 貝層出土土器 (S = 1/2)	101
第12図 出土遺物(6) 貝層出土土器 (S = 1/2)	102
第13図 出土遺物(7) 貝層出土土器 (S = 1/2)	103
第14図 出土遺物(8) 人骨周辺出土土器 (S = 1/2)	104

第15図	出土遺物(9) 貝層出土石器(1) (S=1/2).....	105
第16図	出土遺物(10) 貝層(8・10)・貝層下砂層(9)・出土石器 (S=1/3).....	106
第17図	出土土器分類図(S=1/2).....	109
第18図	大橋、津雲、太田人竹頭蓋計測値、示数の比較 (女性).....	112
第19図	大橋、津雲、太田人竹四肢骨計測値、示数の比較 (女性).....	114

図 版 目 次

図版 1	1. 遺跡遠景(北から).....	117
	2. 遺跡遠景(南から).....	117
図版 2	1. 微高地端部検出状況(北東から).....	118
	2. トレンチ全景(北から).....	118
	3. 微高地端部(貝層除去後)(北東から).....	118
図版 3	1. 貝層検出状況(東から).....	119
	2. 微高地断面土層(東から).....	119
図版 4	1. 人骨検出状況(北から).....	120
	2. 人骨上半身(東から).....	120
	3. 人骨頭部(北から).....	120
	4. 人骨出土地点周辺土層(東から).....	120
図版 5	1. 発掘調査作業風景(南東から).....	121
	2. 出土遺物 石器.....	121
図版 6	1. 出土遺物 貝層下砂層出土土器.....	122
	2. 出土遺物 貝層出土土器.....	122
図版 7	1. 出土遺物 貝層出土土器.....	123
	2. 出土遺物 貝層出土土器.....	123
図版 8	1. 出土遺物 貝層出土土器.....	124
	2. 出土遺物 人骨周辺出土土器.....	124
図版 9	1. 頭蓋骨前面観.....	125
	2. 頭蓋骨側面観.....	125
	3. 下顎骨前面観.....	125
	4. 下顎骨上面観.....	125
図版10	1. 大腿骨.....	126
	2. 上腕骨.....	126
	3. 脛 骨(前面).....	126
	4. 脛 骨.....	126
	5. 桡骨、尺骨.....	126

第1章 遺跡の地理的・歴史的環境

大橋貝塚は岡山県邑久郡邑久町大字豊原字大橋に所在する縄文時代の貝塚である。邑久町は岡山県三大河川の一つ吉井川の東岸に位置し、南は、片上湾口から西南西へ吉井川河口まで約20kmにわたって伸びる、海拔160m程度の連続する丘陵地帯によって、岡山市西大寺・邑久郡牛窓町と接し、北は、海拔140～200mの独立丘陵により長船町と隣している。邑久町の中央部は千町平野と呼ばれる海拔2m前後のきわめて低平な沖積平野であり、全面水田化されている。隣接する平野として北に花光寺山古墳(註1)・天神山古墳(註2)の立地する長船町服部・土師の平野があり、その対岸には瀬戸町から旧上道町(現岡山市)にかけて砂川の貫流する広い平野が形成され、浦開茶臼山古墳等が所在する。砂川を溯れば山陽町の平野部に至る。千町平野の東端では谷が二方向に分かれている。一方は千町川の上流部にあたり狭長な河谷を形成している。この河谷を溯って邑久町高助付近から南へ丘陵を越えると約1.5kmで邑久町尻海の錦海岸へ出る。南下せずに高助から庄田を通り、標高80mのオノ峠を越えると、狭長な河谷沿いに虫明湾に至る。もう一方の谷は、邑久町・長船町境の独立丘陵と片上湾口から伸びてきた丘陵との断絶部にあたり、最奥部は標高12mのごく緩やかなやや広い峠となる。この長船町西須恵の峠を過ぎるとやや広い盆地に出る。盆地の東端からさらに西北西へ千田川上流の河谷を溯れば4.5kmで備前市鶴海の片上湾岸へ達する。邑久町南部の丘陵地帯は最大幅で約3kmを測るが、更にその南に平行して牛窓半島から児島湾口へ走る丘陵地帯と連接している。連接部分を境として、両丘陵地帯の間に、東には錦海湾、西には西大寺下阿知・東幸崎・一宮の狭長な平野部を挟んでいる。大橋貝塚はこの邑久町南部丘陵地帯の北辺裾部に位置する。南部丘陵地帯には、北辺に沿って西南西へ流れる千町川へ北流して合流する小河川が数本ある。これらの河川はいずれも丘陵奥部まで侵入し、浸食による狭長な河谷を形成している。今回の発掘調査の契機となった河川改修工事の実施された長谷川はこれらの河川の一つであり、この西岸、千町川との合流点付近に大橋貝塚はある。

大橋貝塚については過去いくつかの報文がある(註3)。またいくらかの土器片が採集され現在邑久考古館に陳列保管されている。出土する土器はおおむね前期から後期に渡るものであるが、早期押型文土器が一片採集されたという(註4)。採集された土器は編年上からは大きな不連続を示さず、むしろかなり連続したもので、長期間に渡り生活が続けられたようである。遺跡地は現在宅地と水田になり、その大半は削平によって消滅したと考えられる。遺跡地内にある中尾文夫氏宅の住宅西側の崖面には貝層と泥土層が互層になって幾層にも堆積しその厚さは2mを超える。長谷川に沿って西岸丘陵裾を通る道路の崖面にも薄い貝層がみられ、貝塚が丘陵斜面にまで広がっていることを示している。貝塚の広さはざっと3,750㎡程度あるものと推定される。削平されたとはいえ、宅地・水田の下にはまだ何層かの貝層が遺存していることは今回の調査結果からして確実である。

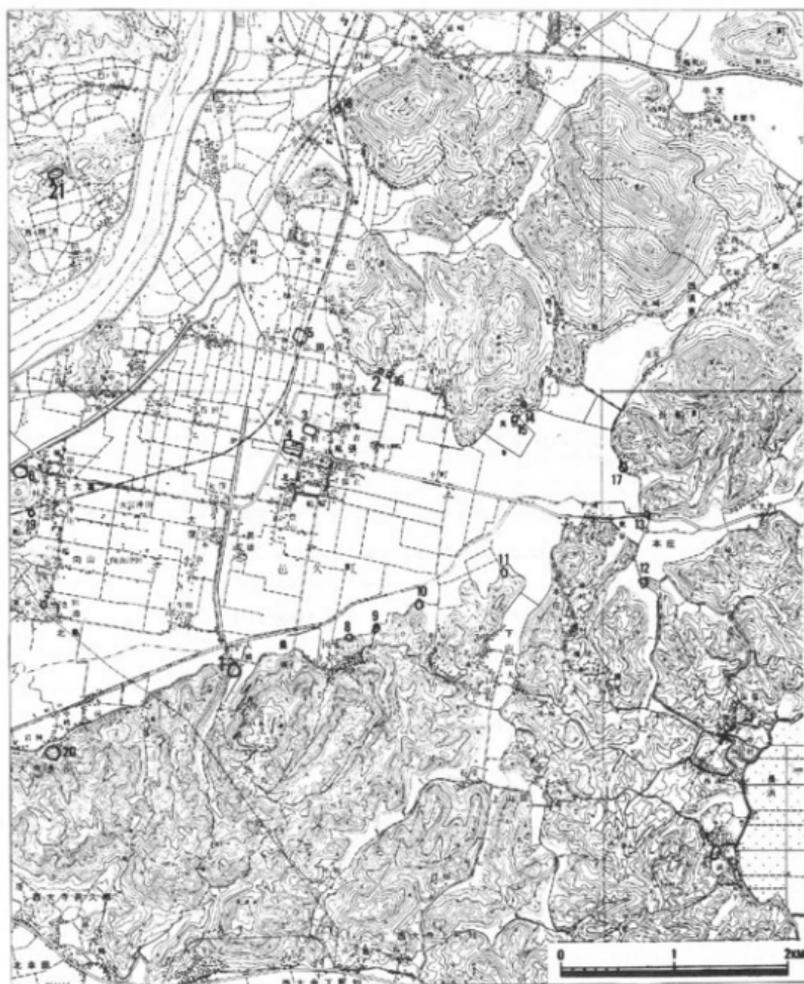
千町平野周辺における縄文時代の遺跡は僅少であり、確実なものとしては、大橋貝塚と宮下貝塚(註5)の二遺跡しか知られていない。宮下貝塚は大橋貝塚の対岸部、長船町境の独立丘陵裾に位置して

いる。現在はその大半が破壊されて遺跡の状況を把握することは困難であるが、出土した遺物は採集されて邑久考古館に陳列されている。それを見れば、出土した土器片は羽島下層式から磯の森式を経て中期に至るもので、大橋貝塚とほぼ併行して存在していたことが知られる。広く吉井川東岸地域を見わたしても縄文時代の遺跡は少なく、この二つの貝塚はもっとも北に位置するものである。吉井川以東地域における最古の遺跡は牛窓半島の南に点在する島々にある。前島・黄島(註6)・黒島(註7)がそうであり、縄文早期の押型文土器を出土する貝塚や散布地が知られている。特に黄島貝塚出土の土器は黄島式と呼ばれ、瀬戸内地域の縄文式土器編年の標式とされている。早期に続く前期の遺跡としては前述の宮下・大橋の二貝塚があり、中期から後期にまで続く。後晩期の貝塚は大橋貝塚の他に再び牛窓湾の黄島に出現し、西大寺吉井川左岸にも、黒和貝塚(註8)等、二・三の貝塚が知られる。なお、吉井川西岸の縄文遺跡のうちりに近接した著名なものとして、瀬戸町から旧上道町に続く平野部の西端に前期の沼貝塚があり、邑久町対岸の百枝月丘陵を越えた砂川西岸に後期の竹原貝塚(註9)が所在する。百枝月の丘陵上では縄文に先立つ先土器時代の遺跡が立地している(第1図21)

弥生時代に入り千町平野周辺の遺跡数は飛躍的に増大する。南部丘陵裾から北部独立丘陵裾部にかけて千町平野を取り巻くように点々と貝塚が形成される。このような遺跡の増大の大きな要因の一つとして、千町平野の陸化の進行が挙げられよう。縄文時代、特に大橋貝塚が形成され始めた頃には千町平野はかなりの部分が海中に没していたと想定される。それが、海退と丘陵部からの土砂の運搬による堆積作用によって徐々に陸化が進行し、かなり平地が形成されたものであろう。この陸化の過程の現象で注意すべきものに、邑久町山田ノ庄付近の丘陵裾部から南方へ舌状に潤徳付近まで細長く伸びた微高地の形成がある。この微高地はおそらく吉井川の沖積作用によって砂洲状につくられた自然堤防と考えられ、この微高地上に点々と遺跡が立地し、微高地全体が一つの大きな散布地となっている。著名な門田貝塚(註10)はこの微高地上に立地する。門田貝塚は弥生前期の貝塚であり、多量の前期弥生式土器を出土している。貝塚の他にも住居址、ピット等が検出され、弥生前期から継続する集落址である。弥生中期には丘陵上にも遺跡が出現し、遺跡は更にその数を増し、古墳時代に入っていく。

註

- (1) 梅原未治「備前村幸村花光寺山古墳」『近畿地方古墳墓の調査2』日本古文化研究所報告4 1937年
- (2) 梅原未治「備前新庄天神山古墳」『近畿地方古墳墓の調査3』日本古文化研究所報告9 1938年
- (3) 出射「大橋兵塚発掘」『史淵』1 1950年、木村幹夫「岡山県邑久郡豊原貝塚について」『吉備考古』90 1955年、木村幹夫「岡山県邑久郡大橋貝塚」『日本考古学年報』3 1955年
- (4) 編集部編「瀬戸内地区押型文土器出土遺跡地名表」『瀬戸内考古学』1 1957年
- (5) 鎌本義昌「吉備地方における早、前期縄文式土器の変遷について」『土』18 1951年
- (6) 鎌本義昌「備前黄島貝塚の研究」『吉備考古』77 1949年、立命館大学史前学会「瀬戸内海黄島貝塚発掘概報」『日本史研究』11 1949年、江坂舞弥「岡山県邑久郡黄島兵塚(1)」『日本考古学年報』1 1951年、酒誌伸男「岡山県邑久郡黄島貝塚(2)」『日本考古学年報』1 1951年、鎌本義昌「岡山県邑久郡黄島貝塚」『日本考古学年報』2 1954年、石野喜三男「岡山県邑久郡黄島貝塚」『日本考古学年報』17 1969年



- | | | | |
|-------------|---------------|---------------|-----------------|
| 1. 大橋貝塚(縄文) | 6. 大富貝塚(弥生) | 11. 馬ヶ端貝塚(弥生) | 16. 半田貝塚(弥生) |
| 2. 宮下貝塚(○) | 7. 田測A貝塚(○) | 12. 長谷口貝塚(○) | 17. 土佐貝塚(○) |
| 3. 門田貝塚(弥生) | 8. 蔵が端貝塚(○) | 13. 石仏貝塚(○) | 18. 箕輪貝塚(○) |
| 4. 堂免貝塚(○) | 9. 円張東貝塚(○) | 14. 真徳A貝塚(○) | 19. 奥の谷貝塚(○) |
| 5. サアサ貝塚(○) | 10. 船越ヶ端貝塚(○) | 15. 真徳B貝塚(○) | 20. 岩神貝塚(縄文・弥生) |
| | | | 21. 百枝月遺跡(先土器) |

第1図 遺跡位置図 (S=1/50000)

- (7) 伊津志志『押髪文を出せる備前黒島遺跡』『考古学』9 1938年、江坂輝弥『黄島、黒島貝塚及宮脇遺跡の日本新石器時代に於ける編年の位置について』『吉備考古』78・79 1950年
- (8) 紀村架津秋『黒和貝塚』『史叢』1 1950年、木村幹夫『備前邑久郡黒和遺跡略報』『吉備考古』84 1952年、木村幹夫『岡山県邑久郡黒和貝塚』『日本考古学年報』3 1955年
- (9) 木村幹夫『岡山県上道郡竹原貝塚について』『吉備考古』87 1953年、鎌木義昌『岡山県上道郡竹原貝塚』『日本考古学年報』2 1954年、木村幹夫『岡山県上道郡竹原貝塚』『日本考古学年報』7 1958年
- (10) 長瀬 薫『岡山県邑久郡邑久村門田貝塚』『考古学論叢』4 1937年、鎌木義昌『門田貝塚の文化遺跡について』『吉備考古』84 1952年、鎌木義昌『岡山県邑久郡門田遺跡』『日本考古学年報』3 1955年、近藤義郎『岡山県邑久郡門田貝塚』『日本考古学年報』19 1971年

第2章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

大橋貝塚は邑久町の南部丘陵地帯から北流する河川の一つである長谷川が千町平野に流れ出す地点の左岸、丘陵端裾部に位置し、かつて千町平野がまだ海であった時の河口付近にあたる。現在、長谷川は大橋貝塚の東端をかすめるような形で流れているが、この河川は狭長な谷部を流下しているため、降雨時には各支谷の水を集めて水量が急増し、流域をしばしば洪水の危険にさらしている。また運搬される砂の量が多く、下流では激しい砂堆のため、ひんぱんに底ごらえ等の河川改修工事を必要としている。このような事状から、岡山県土木部砂防課では長谷川砂防工事を計画し、掘削による流路の拡張と変更ならびに堤防の改築等の工事を実施することとなった。

ところが、流域に周知の遺跡である大橋貝塚（『岡山県遺跡地図』第二分冊、No. 4）が所在しているため、土木部では事業の実施に先立ち岡山県教育委員会に対し協議を申し入れた（文書 砂第143号 昭52・12・27）。大橋貝塚に接する長谷川の左岸堤防上の畑地には現状で貝の散布がみられていたが、町教育委員会からの資料によれば、それらの貝は堤防の改築時に搬入された土砂の中に含まれていたものであるということであり、また地形的にも貝塚の末端部にあたっているため、貝塚の広がり工事区域にまで及んでいるかどうかを把握することが困難であった。このため県教育委員会としては貝塚の範囲が工事区域内に及んでいるかどうかを確実に把握することが必要であると判断し、とりあえず、河川内で坪掘りを実施することとした。

昭和52年11月4日、文化課職員 正岡睦夫、岡本寛久の二名が現地へ赴き、重機による坪掘りを実施し、左岸堤防下には貝層がみられることを確認した。しかし、貝層中からは土器等の貝以外の遺物がほとんどみられず、貝層も薄いものだった。この結果と地形ならびに周辺の聞き取りから設計図No. 18から北50mの間に貝塚の存在を想定し、設計変更等による貝塚の保護を求めて土木部と協議を行った。しかし、設計上からは貝塚の北方にある橋の位置を変更することが不可能なため、貝塚を避けて

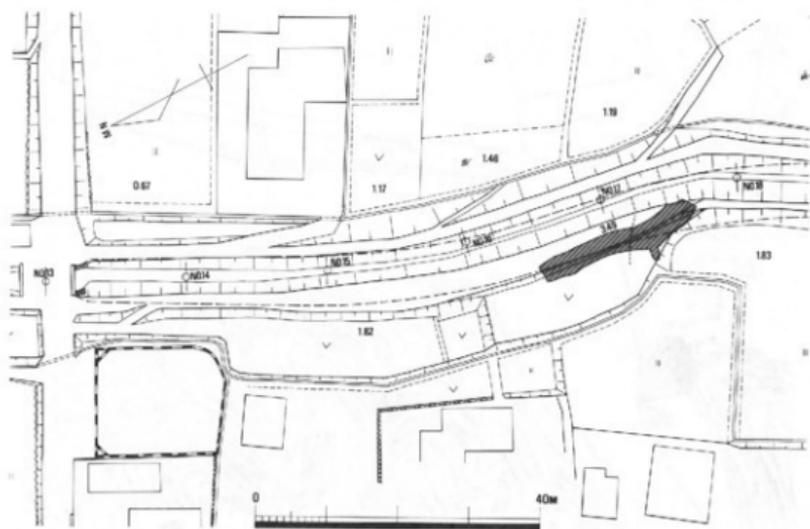


第2図 遺跡周辺地形図 (S=1/7500)

流路を設定すれば大きく湾曲することになって危険であり、また上流から流路を大きく変更することは既存の田畑や家屋を大幅に変えることになるという見解が出され、設計変更はきわめて困難と考えられた。県教育委員会としては、工事にかかる部分は貝塚の末端部と考えられ、あまり多量の遺物が出土することも予想されないと判断し、やむなく工事予定地域については記録保存の措置をとることとし、経費については土木部の負担で調査を実施することで合意した。

第2節 調査の実施

発掘調査は昭和53年6月26日より実施した。調査開始時点での現場の状況であるが、工事は既にNo. 18まで終了していた。さらに、調査に入る前の週に雨天の日が続いて河川の水量が急増したため、下流で工事をしている関係上、No.17付近に堰を仮設し、右岸の堤防を切って水を東の水田部分へ放流するように応急工事がなされていた。季節柄この堰を切ることが躊躇されたのと、貝塚の中心部に近いのはNo.16~15付近と想定していたため、この仮設の堰から北へ左岸堤防下に幅2.5m、長さ17mのトレンチをまず設定して掘穿に入った。昨年の坪掘りによって堤防は相当の厚さで砂礫土の造成がな



第3図 発掘調査区位置図 (S=1/800)

されていることを確認していたので、この砂礫土は重機を使用して除去した。トレンチ調査の結果、南端で微高地の端部が検出され、その上面に貝層がのっているのが確認された。しかしそより北の方では貝層はいっさいみられず、砂礫層の下は厚い青灰色粘質微砂層となり、更にその下は青灰色砂礫層となっていた。次に微高地上の貝層を調査発掘したが、この貝層を形成している貝の組成を調査する資料として50×50cmの部分は標本として採集した。ところが、この採集部分の下方で人間の大腿骨らしい骨が二本平行して発見されたため、後世の埋葬による擾乱が想定されることとなり、この貝層の組成を完全に表わしているとは言い難い状況となった。

微高地は北よりも南へ向かって高くなる様子を示していたため、仮設の堰を切断してトレンチを南へ拡張することを決め、重機による盛土除去の後、貝層の検出作業に入った。どうやら、貝層のもっとも厚くて貝の密度の高い部分は標本を採集した地点らしく、拡張部分での貝層は南へ向かって徐々に下降していく様子を見せており、今回の調査部分は貝塚の東端の微高地突端部であったようである。貝層の発掘終了後、微高地部分を削平し、貝層下の砂層・砂礫層中での遺物を採集した。削平は貝層下70cmに達したが、その間貝層はまったくみられなかった。これに併行して、先の大股骨らしいものを調査するため壁側を掘り進めたとこ骨盤が現われ、人骨であることを確認した。しかし、人骨の上半身は工事用地外にあったため、地権者に発掘の希望を伝えて協力を依頼して了解を得、これを発掘した後埋め戻しを行ない今回の調査を終了した。なお、当初No.15とNo.16の間が貝塚の中心部に

もっとも近いと想定していたのと、貝塚端部の微妙な凹凸の可能性を考え、この付近で重機による発掘を実施した。しかし、砂礫層の下には厚い青灰色の粘質微砂層がみられたのみで、貝層はまったくみつからなかった。この微砂層は下流ではより厚く堆積しており、河川ないしは海岸に堆積した砂ではないかと想像される。

調査にあたっては、邑久町文化財保護委員 川崎 努氏から種々のご教示を得、また邑久町教育委員会 横山次男・木下督士両氏にはなにかとお世話をいただいた。厚く感謝します。現地の作業には、炎天下、下記の方々のご協力を得て無事に調査を終了することができた。ここに謝意を表します。

現地作業員氏名

大森昌太 岡本春江 岡本正志 小野田孝忠 小森忠孝 小森八重子 西河一祝 西河春

〈発掘調査日誌〉

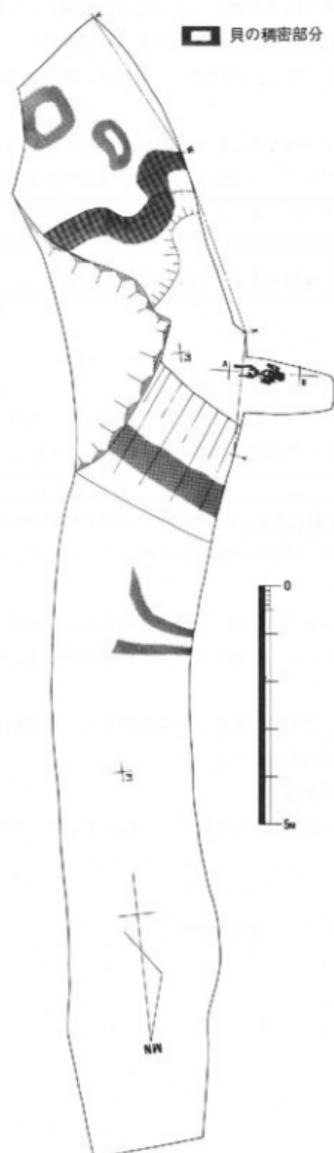
- 1978年6月26日 左岸堤防下、No.17付近から北へ幅2.5m長さ17mのトレンチを設定する。重機による盛土除去後、貝層の検出に入る。トレンチ南端に貝層ののった微高地確認、それより北には貝層なし。
- 6月27日 微高地検出状況写真撮影。貝層の発掘作業に入る。50cm平方で貝層の標本を採集する。貝層を除去する。壁側に大腿骨検出。貝層除去後の微高地および骨の検出状況の写真撮影。
- 6月28日 トレンチを南方へ拡張する。重機による盛土除去後、貝層の面的な広がりを追う。
- 6月29日 貝層の検出状況写真撮影。貝層の発掘に入る。貝塚の端部では貝層が砂を挟んで二層に分かれている。
- 7月1日 大腿骨を追い壁側を発掘、骨盤を検出して人骨であることを確認する。微高地上の貝層の発掘終了。微高地を削平し、壁面の清掃に入る。
- 7月3日 トレンチ西壁の清掃、写真撮影、土層図実測。
- 7月4日 トレンチ西壁土層図実測終了。人骨埋没部分用地外へ拡張して掘り下げる。人骨上半身検出。
- 7月5日 人骨清掃、写真撮影、実測。
- 7月6日 人骨実測、取り上げ。用地外部分埋めもどし。発掘調査終了。

第3章 調査の概要

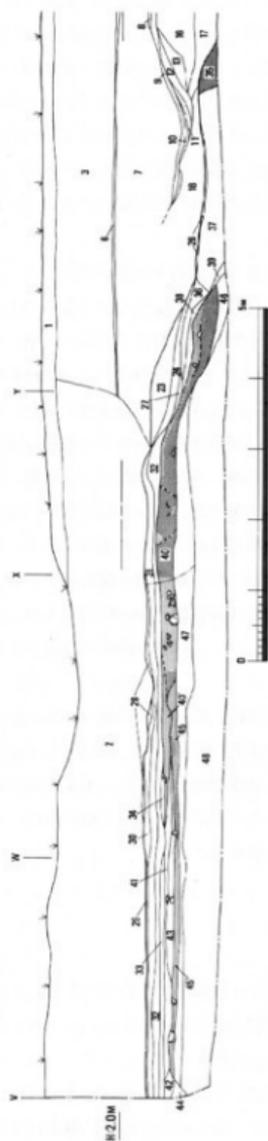
第1節 地形・層位

今回発掘調査した部分は貝塚の東端部で、貝層がほぼ全面に広がっている微高地を検出した。微高地は調査区の南端、No. 17と18の間に位置し、検出部分で幅10mを測る。微高地の東端は重機による坪掘りで部分的に破壊を受けており、さらに東は川の浸食で消滅している。しかし、重機による掘削部分は微高地縁辺の斜面部分にあたり、また、調査区南端部分でも微高地が落ち始めているのを確認しており、微高地は今回検出した部分から東へはほとんど延びていなかったと思われる。微高地の上面はほぼ平坦であるが、人骨の埋葬地点がもっとも高く、海拔約1.5mを測る。そこから東・南へ向かって緩く傾斜をしており、縁辺からは約25°の角度をもって落ちている。

微高地の基底部分は砂からなっている。二層に分かれ、下層には粗砂が厚く堆積し、その上に10~30cmの厚さで中砂がのっている。基底部分の上面は微高地周辺より70cm程高い。この基底部分の上に粘土層が幾層か堆積して貝塚を形成している。このように大きくみれば、微高地は砂層と粘土層の二層から形成されている。粘土層は数枚の薄い層が重なり合ったもので、全体で約35cmの厚さがある。この層の中に貝を含んだものが二枚みられた。微高地縁辺部では粘土層が斜面に沿って流れ落ち、厚く堆積している。この斜面に堆積した粘土の上には、さらに砂礫の堆積があり、北側へ薄く広く流れ出し、その先端には貝を含んだ粘質の微砂層が微高地を取り巻くように細長く巡るようである。微高地の下端部分で



第4図 発掘区全体図 (S=1/120)



貝含量小
貝含量大

- | | | |
|-----------------------------|------------------|--------------------|
| 1. 粘土 | 22. 青灰色粘質砂礫土 | 40. 45. 暗灰色粘土混じり貝層 |
| 2. 3. 盛土 | 24. 38. 29. 灰色微砂 | 40'. 貝混じり灰黄色粘土 |
| 4. 6. 8. 28. 灰褐色微砂 | 27. 32. 青灰色粘土 | 41. 茶褐色粗砂混じり暗灰色粘質土 |
| 5. 7. 16. 18. 23. 37. 灰褐色砂礫 | 29. 銅鉄沈澱 | 42. 粘土混じり灰色微砂 |
| 9. 17. 灰褐色粗砂 | 30. 深灰色粘質微砂 | 43. 粗砂混じり青灰色粘土 |
| 10. 灰褐色礫 | 31. 淡青灰色粘質微砂 | 44. 灰黑色中砂 |
| 11. 淡青灰色粘土 | 33. 茶褐色泥質灰色粘土 | 45. 貝混じり暗青灰色粘土 |
| 12. 14. 15. 19. 26. 灰褐色中砂 | 34. 青灰色粘土 | 46. 青灰色粘土 |
| 13. 暗褐色粘質土 | 35. 貝混じり青灰色粘質微砂 | 47. 暗灰色中砂 |
| 20. 淡灰色砂礫 | 36. 褐色微砂 | 48. 青灰色粗砂 |
| 21. 淡青灰色砂礫 | | |

第5図 発掘調査区西壁新面土層図 (S=1/100)

は貝層から流れ出た有機質の炭化物が砂礫に付着して黒く変色している。縄文時代に形成された層は上述の微高地の砂層・粘土層と、その縁辺斜面に堆積した砂礫層がみられるが、土層岡北端にみられる青灰色粘質砂礫土とその上に北から南へ流れ出すように堆積している数枚の砂層・砂礫層もその可能性がある。これらの層の上に堆積している砂礫土は河川堆積あるいは堤防の盛土である。微高地上の粘土層の上部にある粘質微砂層については、その土質や斑鉄の沈着状態から判断して水田に関係した層とみられる。おそらくは、隣接する水田が過去にこの付近まで広がっていたものであろう。このことから、貝塚はこの開田によって大きく削平されたことが予想される。水田層の上方の厚い砂礫層は本工事のため盛上げられたものである。

貝層は微高地の基盤である砂層の直上に堆積し、ほぼ微高地上一面に広がっているが、さらに微高地縁辺の傾斜面にも流れ込んだ状態で厚く堆積している。貝層は純貝層ではなく、かなりの土を含み、微高地南半では土の量が貝よりもはるかに多い。微高地北半から傾斜面にかけては混土貝層、南半は混貝土層と呼ぶべき状況を呈している。貝層は人骨埋葬部分あたりがもっとも厚く、30cm程度を測る。この部分から南へ3m程離れると貝層が二層に分離し、間に貝を含まない粘土層を挟む。このことから、人骨埋葬部分周辺も二層に分離されるべきかもしれないが、調査においては明瞭に区別することはできなかった。土層図45と40の境の線は貝の粗密によって画したものであるが、破線の方が正しいようにもみられ、判然としなかった。斜面堆積層も中央に砂をかみ、これを境として二層に分離することが可能である。ただ、この二層が微高地上で二層と繋がるかどうかは不明である。貝層には土器片、獣骨、人骨等が含まれているが、それにもまして、かなりの量の礫を混入していた。礫は円礫・角礫共にあるが、角礫の方が多くようである。礫の大きさは長径10~20cm程度であり、なかには火を受けたものもみられた。人骨は貝のもっとも稠密な部分にあり、貝層の組成の資料を採集したのもこの部分である。

遺物は二枚の貝層と微高地基盤上部の中砂層および、水田に関係した粘質微砂層から出土した。遺物の取り上げにあたっては、貝層が二層に分離している部分では第一貝層、第二貝層として取り上げることができたが、人骨埋葬地点周辺については前述のように分離が困難であり、下まで第一貝層として取り上げた。人骨埋葬地点では、用地外拡張区については人骨周辺出土として取り上げ、また標本として採集した土の中にも含まれていたものも人骨周辺として取り上げた。

第2節 人 骨

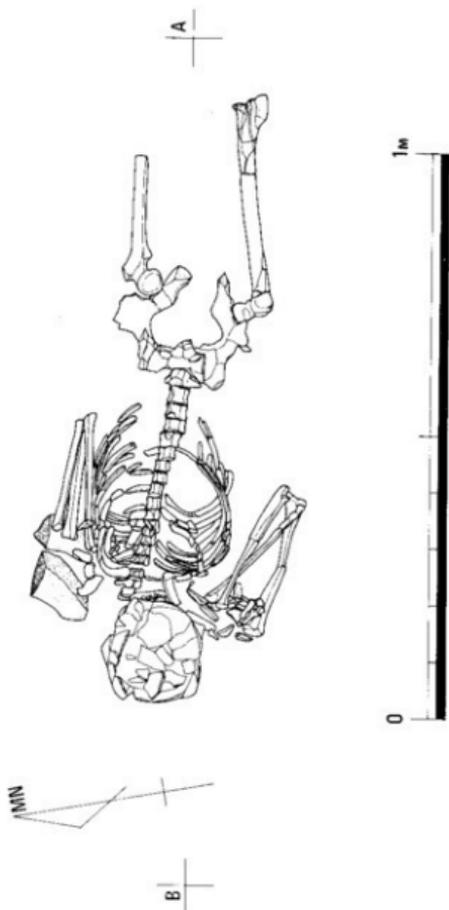
発掘調査を実施した地区は貝塚の最東端にあたり、約30m³程度の貝層を掘っただけだったが、埋葬人骨を一体検出することができた。埋葬人骨の他にも人骨片が数十点採集されたが、いずれも散乱した状態にあり、攪乱を受けて二次的に移動させられたものと考えられる。

埋葬地点は微高地の縁辺部分に位置し、上端からわずか80cm程しか離れていない。人骨は頭部を西へ置いた東西方向の仰臥伸展位をとっていた。下肢骨については一部を獣骨と誤って取上げてしまったため図示しえなかったが、後述されるように、同一個体のものとみられる骨片が採集されており、

本来完存していたものである。伸展葬ではあるが、両腕は掌がそれぞれの肩にあたるような形で強く折り曲げられ、頭部は大きく陥没して破壊されているが、やや顎を引いた様子が見うけられた。このように、全体としては伸展位をとりつつも、上半身はかなり窮屈な姿勢をとっているといえる。体は水平ではなく、微高地上面の傾斜に沿うように頭部が下肢よりも約10cm高かった。

人骨は発掘区の最高所の貝層中から発見された。基盤層の砂層からは遊離しており、貝層のほぼ中央位に埋没していた。この付近の貝層がもっとも多量に貝を含んでいたのが注意された。人骨の上面、周辺には礫もかなり含まれており、左肩甲骨の下に接して角礫が二個みられた。人骨はその状況から判断して埋葬されたものと考えられる。調査区西側の土層観察によっては明瞭な掘込みを確認することができなかったが、貝の疎密から、土層中に破線で示したような掘込みの存在がおぼろげではあるが可能性がある。人骨の埋没していた貝層中から出土した土器はそのほとんどが縄文前期の磯の森式のものであったが、人骨周辺からは中期の船元式とみられる小破片が若干出土

し、その中の一片は人骨に付着した状態であった。大橋貝塚では船元式の貝層が確認されていることから(註1)、船元式の貝層から掘込まれたことも考えうるが、それにしては船元式土器の点数が人骨周辺から出土した磯の森式土器の点数に比して圧倒的に少ない。大橋貝塚では後期の土器も採集されているが、今回の調査ではわずかに数点しか出土していない。このようなことから、検出された人骨は、船元式の中期前半に埋葬されたものと比定したい。後述の鑑定結果によれば、大橋人骨の特徴は後晩期縄文人骨の一般的特徴からは逸脱し、むしろ、縄文早前期人骨の特徴に近いとあり、このことも比



第6図 人骨出土状態 (S=1/10)

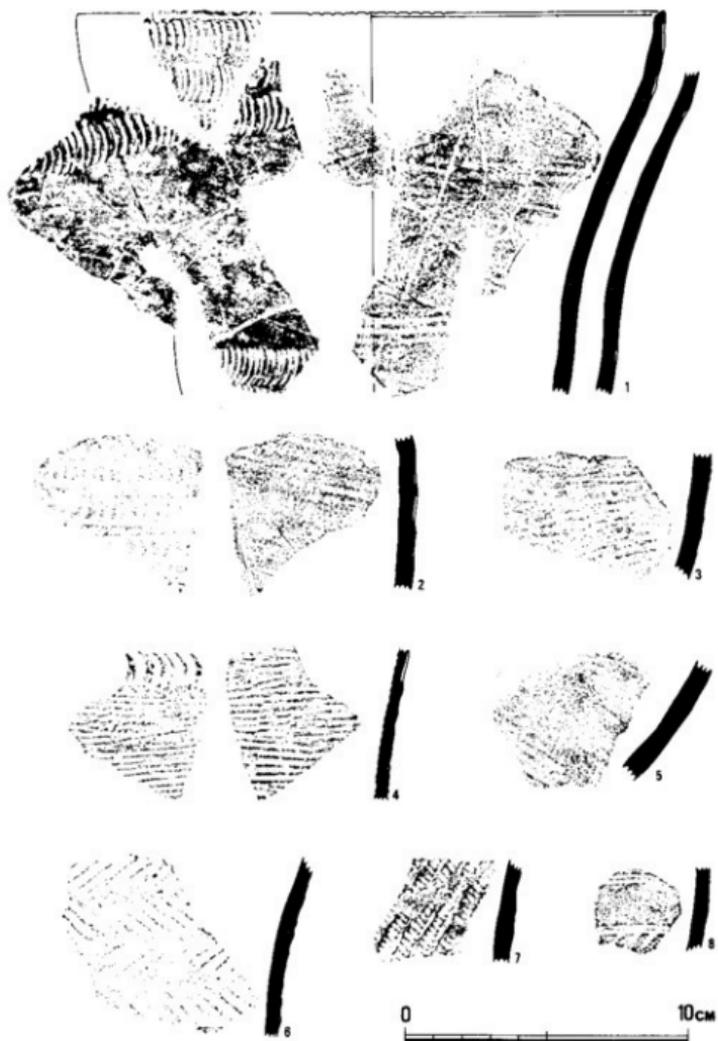
定の裏付けとなるであろう。なお、鑑定によれば、人骨は壮年の若い女性のもたとされる。

第3節 遺物

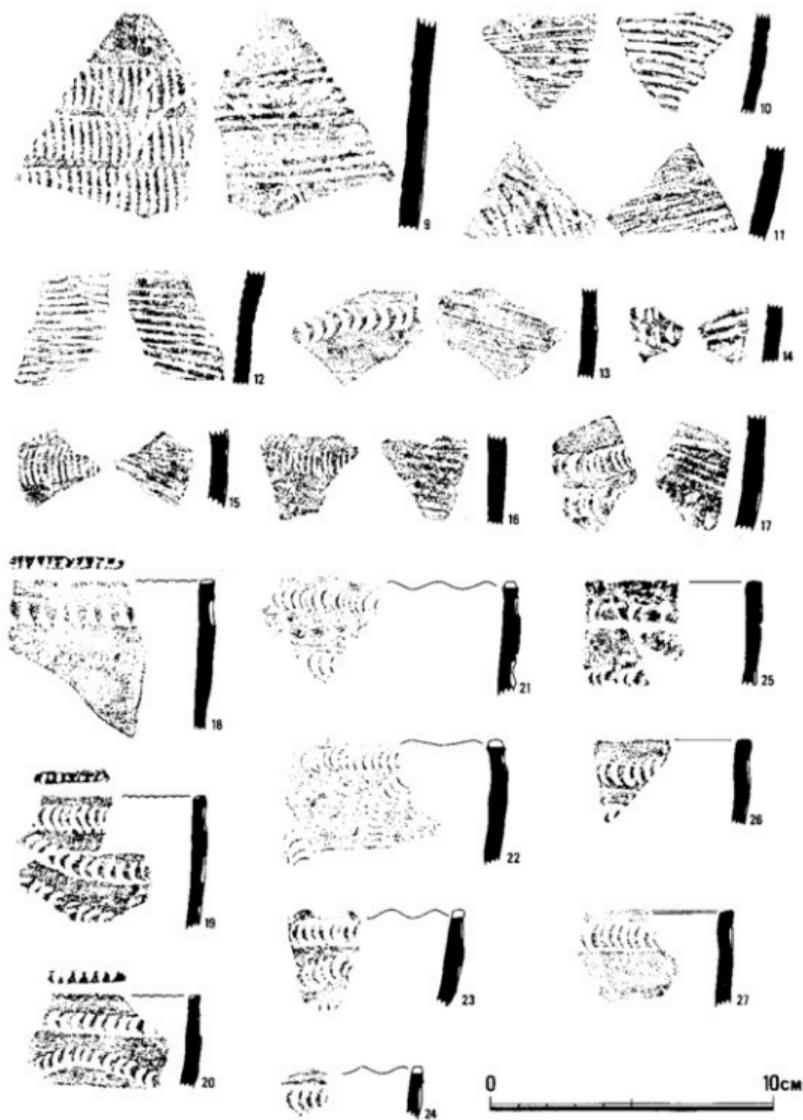
A. 土器 今回の発掘調査で出土した遺物としては、自然遺物の貝類・人骨・獣骨類と人為的加工物である土器・石器がある。点数からすれば貝類が圧倒的なのは当然であるが、それに次ぐものは土器である。土器は破片総数で約500片採集された。そのうち文様のあるものほとんど、条痕文ないしは斜行縄文(羽状縄文を含む)のみの破片のうちから適宜に選択したものを合わせて144片を図示した。遺物の取上げにあたっては、第1貝層上部、第1貝層、第2貝層、貝層下砂層の4層に分けたが、前述したように第1貝層は貝層上部から砂層上面までの厚い部分にわたっており、第2貝層と本来すべきものを含む可能性がある。土器の形式からみれば、第1貝層と第2貝層の時代的な差異はほとんどないと考えられることから、第1・第2の各貝層出土物を合わせて貝層出土物と表現している。砂層と貝層の間には土器形式上の差異が認められるようであり、砂層出土物のみでまとめている。なお、挿図作製にあたって詳細な観察を行う余裕がなかったため、土器の上下が逆転しているものが若干ある。ご容赦願いたい(註2)。

出土した土器は大きく三種に分類される(註3)。第Ⅰ類は条痕文をもつものであり、第Ⅱ類は斜行縄文、ないしは羽状縄文をもつものである。三つめはそれら二種以外のもので点数的には非常に少ない。時期的には、第Ⅰ類、第Ⅱ類は縄文前期のもので、三つめの中期、後期のものであるが、ほとんどすべてが中期前葉と考えられる。

第Ⅰ類(1～5・9～12・14～17) 器壁に条痕文の認められるものである。器壁は4～6mmの厚さがあり、焼成良好で固く焼けしまっている。胎土はかなり砂質で砂粒を多く含み、小石粒もわずかに含まれる。色調は多く暗灰褐色を呈する。器壁に条痕文を認めるが、その在り様によって更に二種に分類される。a型は条痕文がきわめて明瞭で凹凸の深いもの、b型は条痕文がやや不明瞭で、消えている部分もあり、凹凸が浅いものである。a型は外面にも明瞭な条痕があるが、b型の外面は平滑に調整され、条痕を消している。a型には3・4・9～12・14が含まれる。4は器壁3mm程度ときわめて薄手で、固く焼けしまり、淡灰褐色を呈する。条痕は明瞭でD字形の爪形文を施す。9は大型の直線状の爪形文を三列廻らせる。外面には条痕を認めない。14は幅6mm程度の小さな爪形文をもつ。b型には1・2・5・15～17がある。1は深鉢形のかなり大きな破片である。残存部分だけでは正確な復原は困難であるが、あえて図示してみた。口縁部に三列削下半に二列以上のD字形爪形文を廻らせるが、部分的には連続爪形文になっており注意される。口縁端には刻目をつける。胎土には石英粒を多く含み、焼成はやや甘い。外面黒褐色、内面淡灰茶色を呈する。外面は平滑で条痕を消している。内面の条痕は所々で深くなっているが、かなり不明瞭である。5は1の底部付近の可能性ある。15・16は1と類似した幅13mm前後の軽く湾曲した細い爪形文を密接して施す。17の爪形文はそれらとは異なり、太く、強く湾曲したものであるが、内面には条痕を認めることができる。13については内面に条痕に似た横走る凹線がみられるが、ごくかすかなものであり、第Ⅱ類の内面調整と考えられるへ



第7圖 出土遺物(1) 貝層下砂層出土土器 (S=1/2)



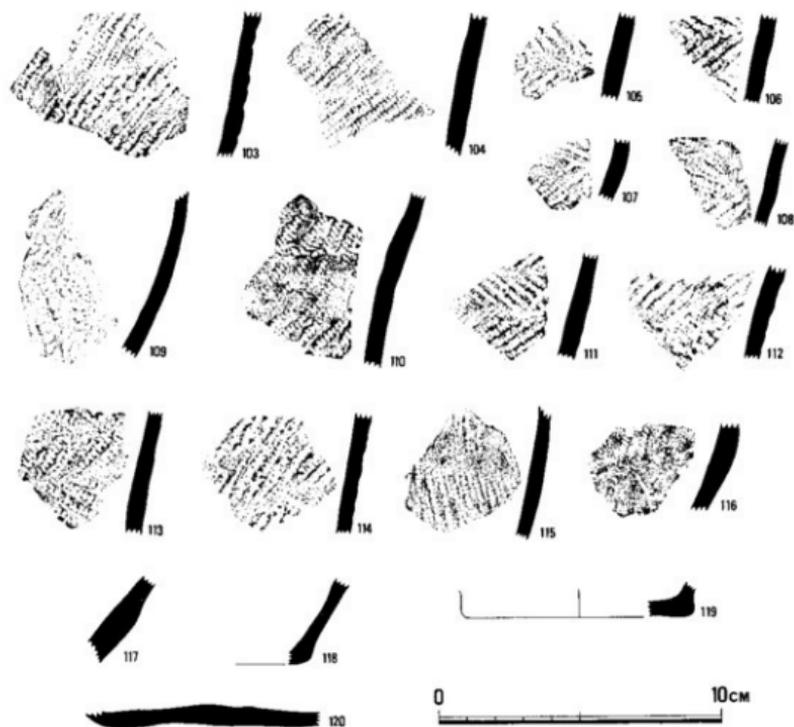
第8図 出土遺物(2) 貝層出土土器 (S=1/2)



第9圖 出土遺物(3) 貝層出土土器 (S=1/2)



第10回 出土遺物(4) 貝層出土土器 (S=1/2)



第11図 出土遺物(5) 貝層出土土器 (S=1/2)

ラ磨きの痕跡の可能性もあり判断しにくい。爪形文は第Ⅱ類に近い。

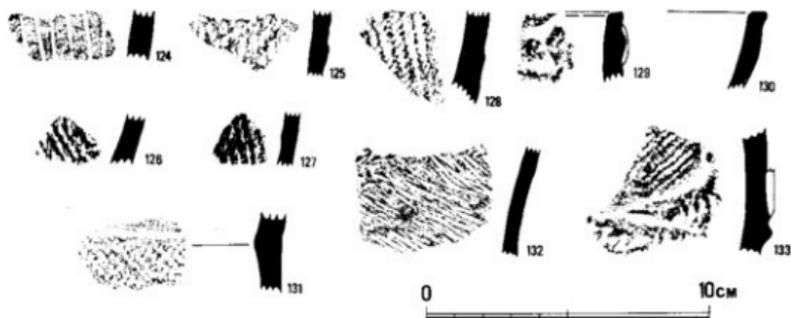
第Ⅱ類(6~8・13・18~123・130・132) 口縁部に爪形文・胴部に羽状縄文ないしは斜行縄文を施すのを通例とするものである。今回の調査で出土した土器の大半はこれに属する。第Ⅰ類との相違点は条痕文の有無にある。器壁は3~6mmと薄く、焼成は良好で堅緻である。色調にはかなりバラエティがあり、暗灰褐色から淡赤褐色まで様々であるが、暗灰褐色と灰茶褐色のものが多い。胎土は第Ⅰ類ほど砂質ではないが、やはり砂粒を多く含む。しかしその量はかなり個体差がある。口縁端の形状にもかなり変化があり、大小の波状を描くもの(21~24・31)と水平なもの、先端を丸くおさめるものと明瞭な端面(11唇)をもつもの(32~36)等の対照的な変化がある。水平な口縁端には刺突を施したり(18~20)、刻目をつけたりするもの(29)がある。器壁は内面・外面共に平滑にされるが、外面には横走する細かな擦痕が多くみられる。内面は外面よりはるかに丁寧に調整され、鈍い光沢を

有するものまである。一定の幅で平坦面のみられるものもあり、ヘラ磨きによる調整と考えられる。ただ口縁上半付近の内面には指頭圧痕の軽い凹凸を残したものがかなりみられる。縄文はしっかりと撚られた節の整ったもので、節は楕円形を呈し、多くは幅2~3mm程度である。糸の間隔は一樣ではなく、104や106のように接触して境が降線状に盛り上がったものもあれば96や110のように間に平坦面の残存するも



第12図 出土遺物(6) 貝層出土土器 (S=1/2)

もある。縄文は一般に鮮明であるが、稀に109のように浅くて節の不明瞭なものもわずかにみられる。口縁部下半の文様帯との境目の縄文の方向はR・L共に認められるが、29・90のように、施文の途中で原体を逆にしたためか、X字形に羽状縄文が交差するものがある。第II類は点数が多いことも手伝って、爪形文にはかなりの変異が認められるが、大きくみれば二種に分けられる。すなわち、爪

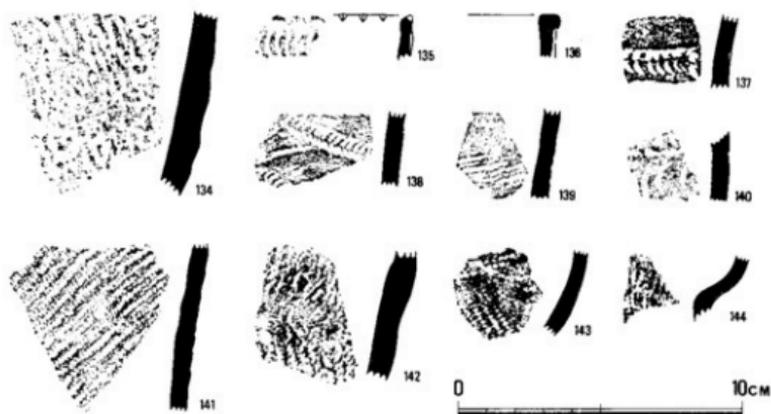


第13図 出土遺物(7) 貝層出土土器 (S=1/2)

爪形文と同じ施文具を用いて、爪形文を平行沈線で録取るものと、平行沈線をもたないもの二種である。前者をb型、後者をa型とする。中には21・22のように沈線をもつものともたないものが共存する例もあるが、これらもb型としておく。

a型は更に二つに細分される。その1は第I類b型と同様の軽く湾曲する幅広の密接した爪形文であり、38・44～49がこれにあたる。38・45は連続爪形文である。38では爪形文の下に同じ工具によるとみられる刺突文がみられる。第I類b型との相違は条痕の有無にすぎない。その2は第I類a型と類似した爪形文がc字形で施されるものである。爪形文は強く湾曲し、幅8mm前後とやや小ぶりであるが、深く刺突されている。13・18～20・23・25・39～42・50・52・53・55～57・121がこれにあたる。この中にもいくつかの変異がみられる。41は幅5mm程の微小な爪形文であり、39・40・42は幅6mm前後の直線に近い、ほとんど内湾しない爪形文である。個々の爪形の間隔でも19・121のように広いものもあれば23・52のように密接したものもみられる。しかし、これ以上の細分はあまり意味がないように思われるのでここでは控える。なお、この種類には連続爪形文はなかった。口縁端の形状には波状(23)と水平の二種がある。文様の構成では口縁端直下に横走する爪形文を直線的に廻らせるのが共通したものであるが、それから下については無文のもの(18)、爪形文を数列直線状に廻らせるもの(25・121)、波状(弧状)に廻らせるもの(19・20・23・39)がある。

b型は爪形文を平行沈線で録取るもので、出土土器の中でもっとも点数の多いものである。平行沈線は爪形文を施した後同じ工具で描いたものと考えられるが、片側の線だけが明瞭なものがある。爪形はa型の二種がいずれもみられるが、平行沈線をもたない爪形文と共存している21・22の爪形はa型の2に近い。連続爪形文もみられる(78・79・80・122)。口縁端の形状には波状(21・22・24・31)・水平(26～30・32～37)の両方がある。文様の構成は口縁端直下と口縁部下端に横走する爪形文を直線的に描き、この二列の間に直線または波状(弧状)の爪形文を数列廻らせる。b型にのみみられるものに縦走する爪形文がある(31・77・123)。この場合の爪形は下に開くもの(123)と上に開くもの(31・77)の両方がある。爪形文が途中で終わる場合には工具を反転させてD字形に刺突し、円

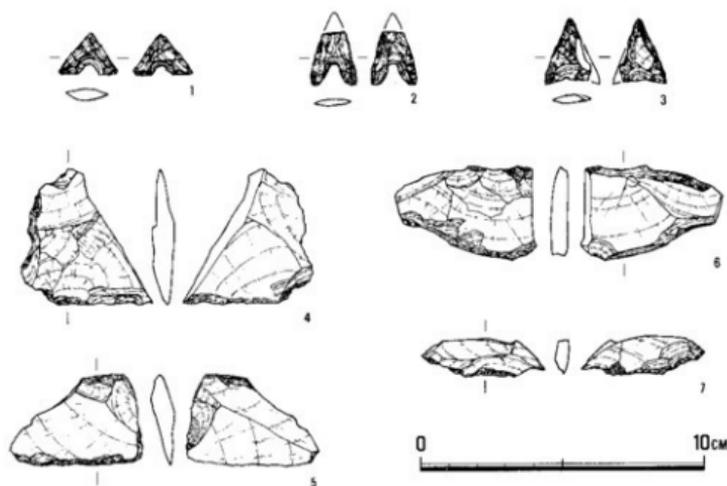


第14図 出土遺物(6) 人骨周辺出土土器 (S=1/2)

を作っておさめる (76・92)。

a・bいずれかは判断できないが、第Ⅱ類に属するものとして縄文の破片と底部片それに8・83・130・132がある。縄文については前述のとおり、条の密接したものと離れたものがあるが、a・bにおける相違は確認できない。88-95で観察するかぎりにおいてはbには両者ともあるようであるが、どちらかといえば間隔のあるものが多い。羽状縄文の場合、それぞれの枝の長さは縦方向の幅で15mm前後と短く6のように何度も屈折している。一方85・103・110のように同じ傾斜で続ける場合もあり、これはおそらく斜行縄文で器壁を飾ったものと思われる。底部とみられる破片が3点ある。120は貝層下の砂層から出土したものである。いずれも平底で、ほぼ平坦なものである。器壁の厚さに大きな変化はない。指頭圧痕の凹凸を残すが、内外面共に丁寧に調整されている。8は半截竹管状の施文具によつたとみられる平行沈線が二条あり、その下に斜行縄文を施す。間隔は狭いが平行沈線ということからすればb型に含まれるかもしれない。130は口縁部だが、深鉢形ではなく浅い椀形の器形になるようである。132は胎土・調整からみれば第Ⅱ類のものと考えられる。ただ縄文が通常のものとは異なりRRになっている。

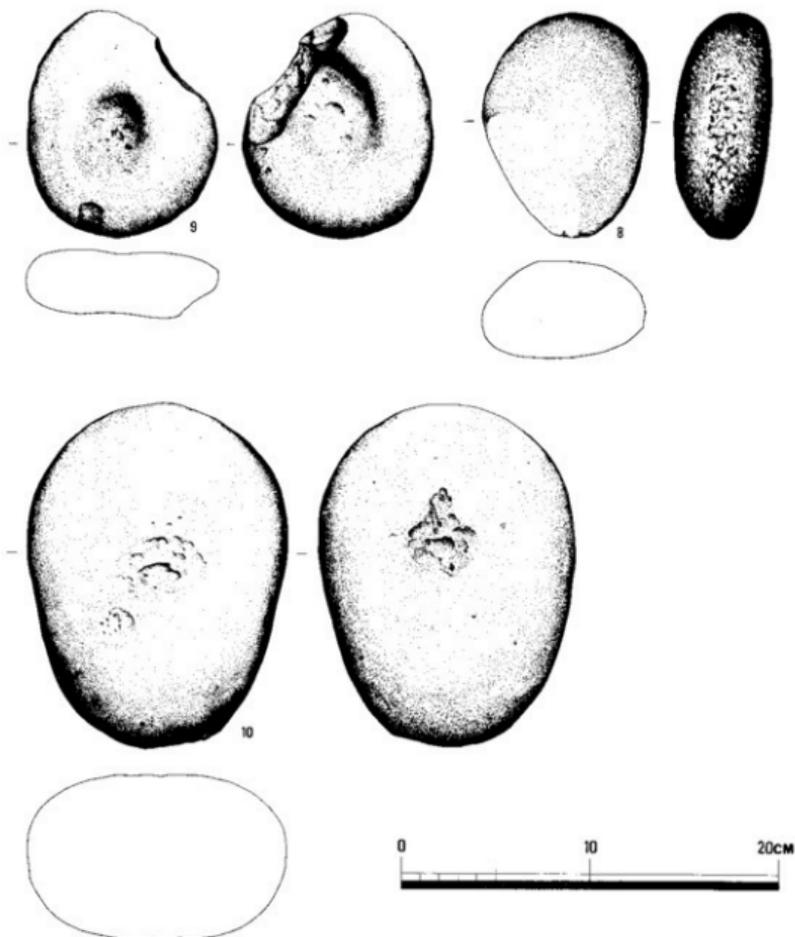
第Ⅰ類・第Ⅱ類に属さない土器もいくらか採集された。図示したものは124～129・131・133で他に人骨周辺のものがある。125～128・131・133の縄文はいずれも節が第Ⅱ類のように条の方向に対して直角にならず、かなり急な傾斜をもち、すこしずつずれて続く。125は節が大粒であるが、他は小さく、細い。126・127の節はまるで搾痕のように細長い。128はよく整った縄文であるが、他はやや荒い。133は突帯の下半に粗い爪形文を施す。126・127の器壁は薄い、128・133などは7mm前後と厚い。129は後期の宮滝式の破片のようである。129以外はいずれも中期前葉の船元式のものと考えられる。



第15図 出土遺物(9) 貝層出土石器(1) (S=1/2)

第14図に示したものは埋葬人骨の周辺から出土したものである。134は人骨に付着していた。135～141・143はいずれも第Ⅱ類の土器である。135・137・140はa型で、138はb型に属する。135は尖りぎみの口縁端に刻目を施す。137は二個一単位の爪形を施し、内面はヘラ磨きされ鈍い光沢をもつ。138は連続爪形文である。139はLLの縄文である。143はかなり不明瞭であるが、羽状縄文とみられる。136の口縁部は折返した部分が剥落したものである。口縁端面をもつ。134・142・144は中期前葉の船元式のものと考えられる。134は固い繊維によるものか、擦痕のように細長くて深い節をもった縄文を施す。暗褐色を呈し、器壁は8mm程度と厚い。焼成は堅緻で、小石粒を多く含む。142の縄文も134と同様である。これらは126・127の縄文とも類似する。144は湾曲部に爪形文を施すようである。

B. 石器 今回の調査で出土した石器は剥片も含めて50点程度である。このうち製品として認められるのは図示したものだけに限られるようである。石材は燧石・凹石を除けば、剥片も含めてほとんどがサヌカイトであり、チャートと黒曜石がそれぞれ1点あるにすぎない。1～3は燧である。1は黒曜石製の楕円形で全長14.5mm、幅21mmを測る。基部に半円形の抉りをもつ。刃部は交互剝離で丁寧に整えられる。中央部は4mmと厚い。重量は0.7gである。この黒曜石は通常の黒色ではなく灰白色を呈し、大分県姫島に産するものとみられる(注4)。2はサヌカイト製の長脚鏃である。先端部を欠損しているが、残存長で18.5mmを測る。基部は深く抉られ、脚部の長さは8mmある。きわめて扁平で厚さは中央部でわずかに2mmである。刃部には細かな剝離を行うが、かなり不規則なものである。重量は0.6gである。3はサヌカイト製の三角鏃である。全長23mmで厚さは4mmである。基部はわ



第16図 出土遺物(10) 貝層(8・10)・貝層下砂層(9) 出土石器 (S=1/3)

ずかに凹んで内湾する。刃部はかなり不規則な細かい剥離を行う。基部には大きな剥離面を残し、数回の調整で終っている。重量は1.2gである。4～7は削器である。いずれも不定形なもので材質はサヌカイトである。6・7については製品かどうか断定しかねる面がある。4・5は刃部に細かい剥離を行うが、4は両面から、5は片面からのみ剥いている。4は折損しているが、5は完形とみられ、

背部に細かい剥離調整を行っている。6・7はいずれも折損品である。6は図の上下両端に細かい剥離を行っているが、刃部はかなり厚い。7は刃部とおぼしきあたりに細かい剥離を行うが、かなり粗いもので、削器と断定しかねる。

第16図に示したものは敲石・磨石・凹石の類である。8は先端部と長辺部に敲打痕が認められる。貝層出土である。9は両面に凹部が明瞭に認められ、片側の凹部はかなり滑らかである。周縁には敲打痕がみられる。貝層下砂層出土である。10は長径180mmの大形の敲石である。一方の先端部分が敲打によりつぶれている。また両面には台石として使用された際に生じたと思われる剥落による軽い凹みが集めてみられる。貝層出土である。敲打痕・磨擦痕・凹部のみられるものは以上の三点だが、他にも扁平な凹部が二点あり、使用痕はあまり明瞭ではないが、この種の石器の可能性はある。この類の石はすべて河原石が使用されている。なお、貝層中からは火を受けた痕跡のある角礫が採集されている。

註

- (1) 今回調査を実施した地区から北西へ約20m離れたところに平尾文次氏宅があるが、その敷地の東端で石垣を築く工事がなされ、船元式の土器片がかなり出土した。貝層が二層認められ、どちらの層もシジミがほとんどを占めていた。
- (2) 第8図13・15～17にその可能性がある。また、図版6の1の写真中の1の大破片は上下が逆転している。
- (3) 土器の分類・形式の比定等全般にわたって岡山県総合文化センター 高橋 麗氏より多人のご教示を得た。深く感謝します。
- (4) 平井 徳氏のご教示による。日高正寿『大分県姫島産黒曜石出土遺跡分布の研究 予報(資料篇)』1976年

第4章 ま と め

今回実施した発掘調査の概要は以上のようなものであるが、約30m²という小範囲の発掘にもかかわらず、埋葬人骨の検出や、かなり限られた時期の土器片がまとまって採集されたことなど、大きな成果があった。

人骨については、瀬戸内地域で従来よく知られ、また資料の公表されているものの多くが中期後半から後・晩期にかけてのものであり、中期前半のものは少ないようである。今回発掘したものは遺存状態がきわめて良好で、骨は肋骨のような細いものまで完存しており、骨格を復原して身体の諸特徴を推定することの可能性を高めている。多くの計測値を得ることができ、中期縄文人の形質を考えるうえで、重要な資料となるであろう。それは、第5章において試られるように、過去の資料との比較においてより一層大きな価値をもつものである。検出された人骨は明らかに埋葬されたものである。類例の少ないこの時期の埋葬形態を知る資料として貴重である。獣骨片もかなり出土したが、多くはシカ、イノシシであり、他の貝塚の出土例とそう大きく違うことはない。イヌの骨の出土が注意を引く。人骨について、埋葬人骨以外で40片程度の破片が採集されたことも留意すべきことである。散乱

状況を詳細にしえなかったため、それが原位置であるか、二次的に移動させられたものか明確ではないが、身体のある部分の骨がかたまっただけで出土しているようでもないので、おそらくは二次的に移動させられたものではないかと考えられる。獣骨と混じり合った形で貝層に包含されていることから、埋葬された人骨よりは古いもので、貝層の堆積期に移動させられたものと考えたい。

今回の発掘調査における成果の一つに500片にのぼる土器片の出土があるが、それらの多くが従来の編年上の一形式内におさまるものであり、今まであまり内容の明らかでなかったその形式をより明確にし、さらには細分する可能性も考えさせるところから、重視してよい資料かと思われる。

出土土器は第3章で述べたように大きくは第Ⅰ類と第Ⅱ類に分けられる。第Ⅰ類は一般に羽島下層式と呼ばれる形式に該当すると考えられる(註1)が、条痕の在り様からa、bの二型に細分した。高橋 渡氏のご教示によれば、b型は磯の森下層式(註2)と呼ばれる形式に属するとされる。磯の森下層式は羽島下層式に後続するもので、条痕文の最終末期に位置し、浅い爪形文と不明瞭な条痕文を特徴とし、連続爪形文の出現をもって、羽島下層式と区別されるという(註3)。今回の調査ではaとbの差異を層位的に捉えることはできなかった。ただb型と同様の爪形文をもちながら条痕文をもたない土器が第Ⅱ類にみられるという事実はある。

第Ⅱ類は磯の森式と呼ばれるものに合致する。磯の森式は羽島下層式に後続する前期中頃の形式と一般に認められている。しかし、まとまった形で報告された資料は少なく(註4)、詳細な内容については明確でない。今回の調査で出土した土器は大半がこの形式に属するものであり、文様帯部分の破片だけでも100点程度あり、磯の森式の内容を明らかにするために有効な資料となりうる。第Ⅱ類は平行沈線の有無によりa型とb型に細分される。a型とb型の時間的上下関係については層位的には確認できなかった。しかし、平行沈線は第Ⅰ類にはまったく認められず、第Ⅰ類b型に類似した第Ⅱ類a型にもみられない。また出土量からは第Ⅱ類b型がもっとも多いことなどから考え合わせるとb型はa型に後続する可能性が高い。なお、第Ⅱ類a型の二種の時代的な前後関係については明確ではない。a型の1は第Ⅰ類bの爪形に類似しているが、a型の2も第Ⅰ類aの爪形に近い(註5)。連続爪形文はa型の1とb型にみられるが、a型の2にはみられないようである。類型別の出土量では、第Ⅱ類b型が半分以上を占め、第Ⅱ類a型2がそれに次ぐ、続いて第Ⅱ類a型1がいくらかみられる。残りほぼ同量でわずかずつ第Ⅰ類と中期のものがある。

最後に、貝について述べておく。貝塚を掘りながら貝については触れなかったが、これは詳細な分類・鑑定をまだ実施していないためである。後日を期したい。略述すると、貝はシジミ、カキ、ハイガイによってほとんど占められており、量的にはシジミが最多である。次いでカキ、ハイガイの順になるようである。

註(1) 間壁忠彦 間壁殿子「里木貝塚」倉敷考古館研究集報7 1971年、藤田志司・間壁殿子・間壁忠彦「羽島貝塚の資料」『倉敷考古館研究集報』11 1975年。

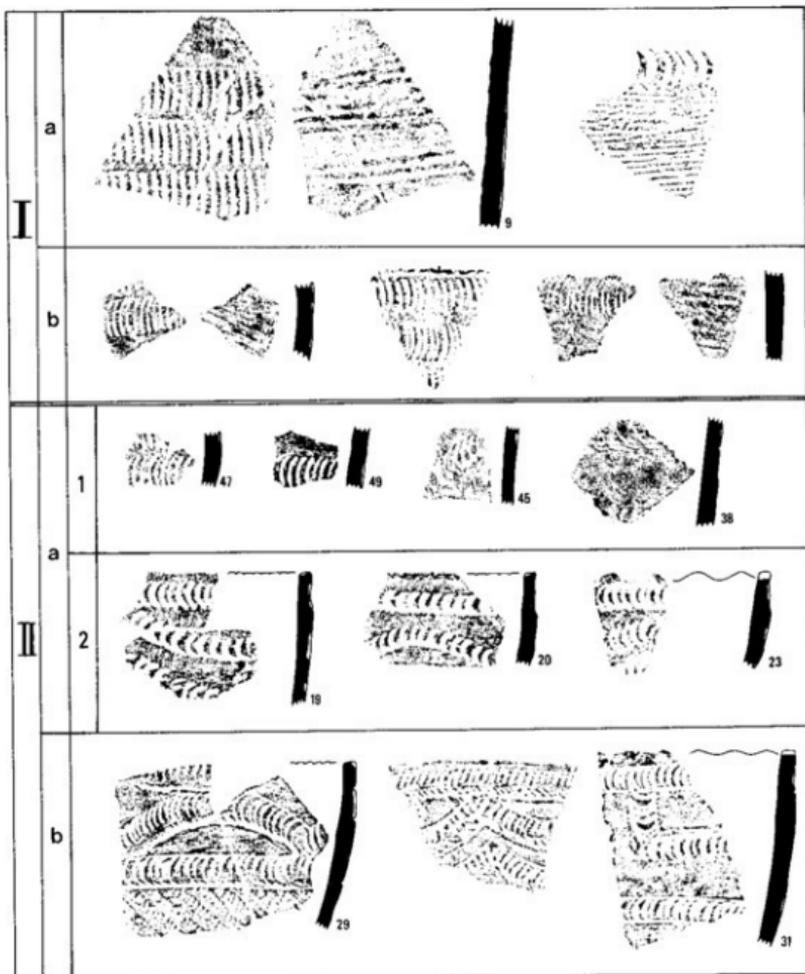
(2) 池田次郎・鎌木義昌「岡山県磯の森貝塚発掘報告」『吉備考古』81・82 1951年

(3) 註1の文献では磯の森下層式にあたるものを羽島下層式の中に含めている。高橋氏によれば、両者の最大の相違点は連続爪形文の出現にあるようである。連続爪形文の出現は単に施工工具の変化にとどまらず、技法上の要

化でもあり、貝殻印痕文が爪形印痕文に変わることはかなり意味を異にするように思われる。

(4) 鎌木義昌『岡山県倉敷市磯の森貝塚』『日本考古学年報』2・3 1954・1955年、図1)と同じ

(5) 高橋渡氏は磯の森式を二期に分けられている。Ⅰ期は条痕文が消滅して縞文が出現する。羽状縞文が優勢であり、連続爪形文が盛行する。Ⅱ期は羽状縞文・斜行縞文が同じ割合にみられ、深い刺突爪形文が連続爪形文を上回る。Ⅲ期は平行洗線文をもった爪形文が出現し、羽状縞文が優勢であるという。本報告の第Ⅱ類a型はⅠ・Ⅱ期に、第Ⅱ類b型はⅢ期に対応するとみられる。



第17図 出土土器分類図 (S=1/2)

第5章 大橋貝塚出土人骨・獣骨の鑑定

第1節 大橋貝塚出土の人骨について

京大大学院理学部自然人類学研究室
教授 池田次郎

大橋貝塚から出土した人骨は、1体分の埋葬人骨と、複数個体の散乱人骨とからなる。

散乱人骨は、骨表面の色調から3群に分けることができる。第1群は、淡い赤褐色を呈するもので、第1貝層から発見された。これには、下顎骨、右肩甲骨、尺骨、指骨、肋骨などの破片13点が含まれる。第2群は、大腿骨、脛骨、上腕骨、橈骨の比較的大きな骨片8点と大白歯1本とからなり、褐色の地に黒色の斑点がある。これらも第1貝層から出土した。第3群は、埋葬人骨と同様、骨表面の色は灰白色に近く、そこに黒色の斑点があるもので、胫骨、腓骨、膝蓋骨、踵骨、距骨、舟状骨、趾骨など22点、その他いずれも下肢骨に属す骨の破片からなる。このうち、左右脛骨、右腓骨、右膝蓋骨、右距骨、左踵骨、左舟状骨、および趾骨は埋葬人骨の一部である可能性があるが、左距骨、腓骨など、明らかに別個体の骨も含まれている。出土層は第1貝層上面である。

第1貝層に掘りこまれた土壌から発見された埋葬人骨は、仰臥伸展位をとる。椎竹、肋骨、左右寛骨の状態は遺体が背中を下にしていたことを示している。大腿骨は左右ともその前面を上にしており、膝関節は伸ばしていたとみてよい。上肢骨は、左右とも肘関節で頭側に強くまげ、手骨は肩甲骨の上に位置する。右の橈骨と尺骨は交叉しており、これは前腕が内側に振れていたことを示す。頭骨は顔面を足の方向に向けている。体軸の方向は東西、頭は西方向にある。

埋葬人骨の骨質は堅牢で、灰白色の骨表面に黒色の斑点がある。骨格の残存状態は下記の通りで下肢骨の一部を除き、ほぼ全身各部の骨が揃っている。

頭蓋骨：脳蓋は頭頂部の大部分、すなわち左頭頂骨の大部分と右頭頂骨の矢状縫合よりの部分を欠損するが、他の骨はほとんど残っている。顔面頭蓋のなかでは、左右頰骨、上顎骨の口蓋突起、歯槽突起および梨状孔縁の下部だけが残存するが、これらの骨は脳蓋とは接続しない。下顎骨では、右下顎頭の一部および左下顎枝外側縁の一部が欠損する以外、ほぼ完全である。

上下顎の歯は、第三大白歯を別とすれば、上顎左側切歯、下顎右側切歯を除く26本の歯が歯槽内にある。欠損する両側切歯の歯槽は閉鎖していないので、この2本の歯は死後脱落したものと考えられる。第三大白歯で萌出しているのは上顎左のそれだけである。

肋骨：椎骨、肋骨は破片ではあるがほとんど揃っており、胸骨は胸骨柄の大部分が残存する。仙骨は第1仙椎に相当する部分だけがある。

上肢骨：肩甲骨は左右とも外側角とそれに接する部分および肩峰のみ残存、鎖骨は右はほぼ完全であるが、左は破片。右上腕骨は完全、左上腕骨は頭部を欠損する。右橈骨はほぼ完全、左橈骨は遺位

端を、右尺骨は茎状突起を、左尺骨は尺骨頭および茎状突起を欠く。残存する手根骨は右小菱形骨、左豆状骨、大菱形骨のみで、左右の中手骨は破片ではあるが全部揃い、指骨は右で3本、左で9本が失われている。

下肢骨：寛骨の主要な欠損部は左右とも腸骨翼の前上部と恥骨である。右大腿骨は大転子および小転子、内側顆を、左大腿骨は大転子、外側顆のそれぞれ一部を欠く。散乱人骨のうち、骨の太さ、性状からこの個体の一部と推定されるものとして、右膝蓋骨、左右脛骨、右腓骨、右距骨、左踵骨、左舟状骨および趾骨数本がある。脛骨は左右とも骨体遊位部約5割を、右腓骨は上下端を欠く。

本人骨は全体として小さく、寛骨の大坐骨切痕は鈍角で、関節窩溝が深いので、女性であることは確実である。恥骨結合面からの年齢推定はできないが、頭蓋骨の縫合に癒着が全く認められないこと、3本の第三大臼歯が未萌出であり、歯冠の咬耗がブローカの3～4度であることなどを総合して、壮年の比較的若い年齢と考えたい。

次に大橋人骨の特徴について検討する。頭蓋骨は全体として小さく、乳様突起、側頭線、頂線などの筋内付着部の隆起は弱い。下顎骨も小さく、とくに骨体が低く、角前切痕は存在しない。特記すべき頭蓋骨の非計測的変異はない。咬合型は鉛字状で、人為的抜歯の痕跡、齧歯などの病変も認められない。

頭蓋計測値、示数(第1表)からみると、頭骨最大長が大きいので頭骨長幅示数は中型に属す。頭骨長高示数は高型の正型よりも、頭骨幅高示数は中型の高型よりにある。横前頭頂示数は中、横前頭頂示数は大きい部類に入る。顔面頭蓋で計測できた項目は上顔幅と口蓋幅だけであるが、前者は大きく、後者はやや小さい。下顎体が低いこととともに、脳頭蓋に比し顎骨の発達が弱いという大橋人骨の特徴を示している。

1.	頭骨最大長	179	25.	正中矢状弧長	369	9 : 8	横前頭頂示数	71.0
2 a.	ナゾン・イニオン長	157	26.	正中矢状前頭弧長	123	27 : 26	矢状前頭頂示数	109.8
3.	グラベラ・ラムダ長	171	27.	正中矢状頭頂弧長	135	29 : 26	矢状前頭示数	81.3
5.	頭骨総長	95	28.	正中矢状後頭弧長	111	30 : 27	矢状頭頂示数	85.2
7.	大後頭孔長	37	28(1)	正中矢状上鱗弧長	74	31 : 28	矢状後頭示数	85.6
8.	頭骨最大幅	138	29.	正中矢状前頭弦長	100	31(1) : 28(1)	矢状上鱗示数	89.2
9.	最小前頭幅	98	30.	正中矢状頭頂弦長	115	43.	上顔幅	108
10.	最大前頭幅	117	31.	正中矢状後頭弦長	95	63.	口蓋幅	37
11.	両耳幅	121	31(1)	正中矢状上鱗弦長	66	65.	関節突起幅	123
12.	最大後頭幅	105	8 : 1	頭骨長幅示数	77.1	66.	下顎角幅	(92)
13.	基底幅	96	17 : 1	頭骨長高示数	(75.4)	70.	下顎枝高(左)	56
17.	バジオン・プレグマ高(135)		17 : 8	頭骨幅高示数	(97.8)	71.	下顎枝幅(左)	35
20.	耳プレグマ高	113	20 : 1	長耳プレグマ高示数	63.1	66 : 65	下顎骨幅示数	74.8
23.	頭骨水平周	506	20 : 8	幅耳プレグマ高示数	81.9	71 : 70	下顎枝示数(左)	62.5
24.	横弧長	307	9 : 10	横前頭示数	83.8	9 : 43	前頭肉眼窩示数	90.7

第1表 大橋人骨頭蓋計測値(mm)、示数

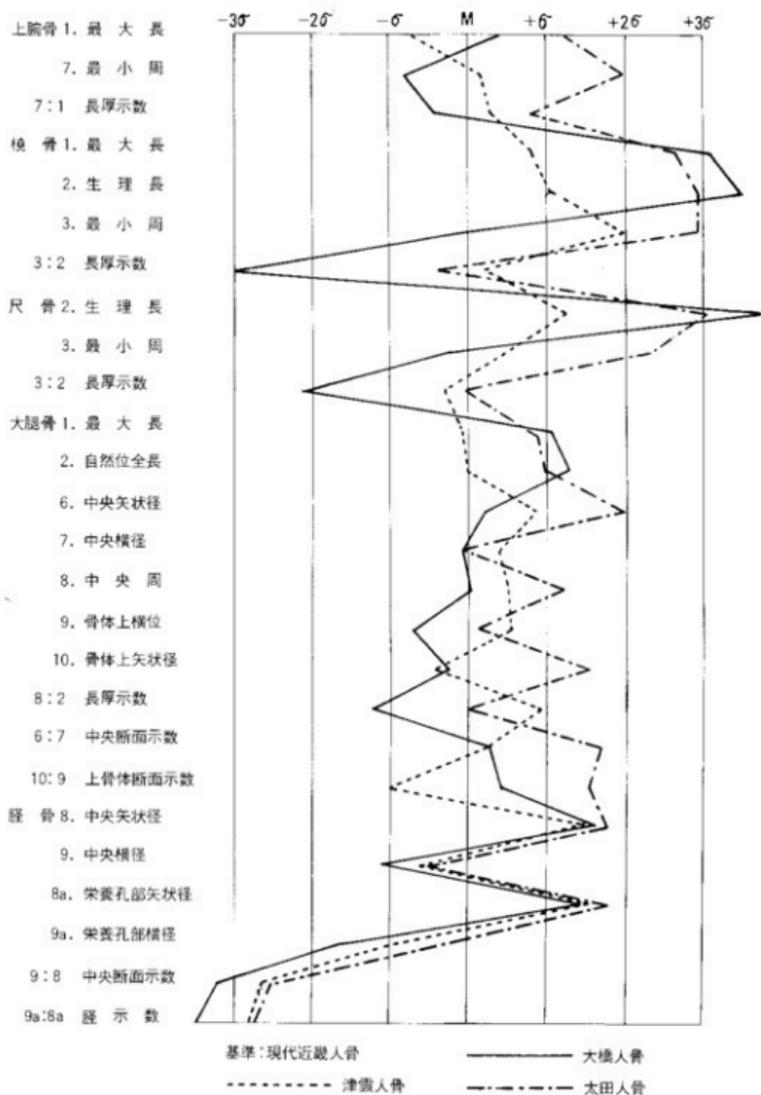
大橋人頭頭蓋の主要な計測値、示数を備中津雲女性人骨（清野・宮本，1926）、備後太田女性人骨（今道，1933）と比較すると（第17図）、これらの縄文人骨はいずれも現代近畿女性人骨（宮本，1924）に比し、頭骨最大長、頭骨水平周が大きく、長耳プレグマ高示数が小さく、下顎の関節突起幅、下顎枝幅が大きいという点で一致している。これ以外の大橋人骨の特徴として、横弧長、横前頭頭頂示数、下顎枝示数が大きいことがあげられる。

次に四肢骨であるが、大橋人骨の特徴はいずれも細長く、きゃしゃであるが、大腿骨の大殿筋粗面、粗線の柱状性の発達は強く 脛骨のヒラメ筋線にあたる部分には溝状の凹みが認められ、尺骨粗面は深い窩をなすなど、四肢骨の筋肉附着部は頑丈である。上腕骨には左右とも滑車上孔が認められる。四肢骨計測値、示数（第2表）は、すべての骨の繊細性と、大腿骨、脛骨の扁平性を明瞭に示している。藤井（1960）の推定式により左大腿骨から算出された身長は151.97cmである。

大橋人骨の四肢骨計測値を津雲女性人骨（清野・平井，1928a、b）、太田女性人骨（今道，1934，1935）と比較するために、現代近畿女性人骨（宮本，1925，平井・田嶋，1928）を基準とする偏差折線図（大腿骨は左側、他は右側）を描くと（第18図）、大橋人四肢骨の長厚示数がいずれも極度に小さいことを別にすれば、縄文人骨は互によく似た傾向がある。とくに、脛骨の骨体中央部と栄養孔部における矢状径、横径と、横断示数、脛示数では三者が完全に一致し、縄文人脛骨の強い扁平性を如実に示している。

上腕骨		左	右	大腿骨		左	右
1.	最大長		278	1.	最大長	404	
7.	最小周	53	53	2.	自然位全長	403	
7:1	長厚示数		19.1	6.	中央矢状径	24	24
桡骨				7.	中央横径	23	23
1.	最大長		228	8.	中央周	75	75
2.	生理長		218	9.	骨体上横径	26	26
3.	最小周	35	35	10.	骨体上矢状径	22	21
3:2	長厚示数		16.1	8:2	長厚示数	18.6	
尺骨				6:7	中央断面示数	104.3	104.3
2.	生理長		223	10:9	上骨体断面示数	84.6	80.8
3.	最小周	32	32	脛骨			
3:2	長厚示数		14.4	8.	中央矢状径	27	27
				9.	中央横径	17	17
				8a	栄養孔部矢状径	30	30
				9a	栄養孔部横径	18	18
				9:8	中央断面示数	63.0	63.0
				9a:8a	脛示数	60.0	60.0

第2表 大橋人骨四肢骨計測値 (mm)、示数



第19図 大橋、津雲、太田人骨四肢骨計測値、示数の比較(女性)

縄文中期に比定される大橋人骨には、後晩期縄文人骨の一般的特徴として知られているものから逸脱したいくつかの特徴が認められる。すなわち、脳頭蓋に比し発達した弱い上下顎、四肢骨では、細長い骨体と、これとは対照的によく発達した筋肉付着部、大きな身長などがそれであって、身長以外のこれらの特徴は、内藤（1968）、鈴木（1968）、小片（1977）らによって縄文早前期人骨の特徴とされているものである。

大正15年、清野謙次が発掘した太田貝塚人骨は、津雲貝塚をはじめとする中国地方の後晩期縄文人骨が屈葬で埋葬され、抜歯が施されているものが多いのに対し、ほとんどすべてが仰臥位で、その大部分が伸展位をとり、抜歯人骨はきわめて少なかった（清野、1969）。清野は、太田人の方が津雲人より古く、人骨の所見もそれを示すと述べているが、人骨の時代は明確にされていない。昭和39年に太田貝塚を発掘した潮見ら（1971）は、出土する縄文土器には前期のものと中期のものがあるが、人骨の周辺から発見された土器は前期の羽島下層式土器にあたるものが多いので、これまで太田貝塚人として知られている人骨が前期前半のものを含む可能性があることを指摘している。

清野（1949）は、頭蓋骨、大腿骨計測値の型差において、太田人骨は津雲人骨より現代人骨から遠いことから、太田人の方がより古いタイプであると結論しているが、四肢骨に関する限り、縄文早前期人の方が後晩期人よりきゅしゃであることは前述の通りである。しかし、四肢骨がきわめて頑丈である点を除けば、太田人骨は、頭蓋骨、四肢骨計測値とも後期の津雲人骨より中期の大橋人骨に近く、また大腿骨最大長の平均値から筆者が計算した推定身長は151.16cmとなり、大橋人とともに縄文人としてはかなり高身長であることは注目に値する。

本資料を調査する機会を与えて頂いた岡山県教育委員会に感謝の意を表したい。

文 献

- 藤井 明 1960 四肢長骨の長さとの関係に就いて、順天堂大学体育学部紀要 3：49-61。
平井 隆・田嶋丈夫 1928 現代日本人人骨の人類学的研究。第4部 下肢骨の研究（其一）、人類誌 43、附録：1-82。
今道四方爾 1933 太田貝塚人骨の人類学的研究。第2部 下肢骨の研究、其一 大腿骨、膝蓋骨、脛骨及腓骨の研究、人類誌 49、附録：1-80。
今道四方爾 1935 太田貝塚人骨の人類学的研究。第3部 上肢骨の研究、人類誌 50、附録：1-80。
清野謙次 1949 「古代人骨の研究に基づく日本人種論」岩波書店、東京。
清野謙次 1969 備後国沼津郡高須村太田貝塚、清野謙次「日本貝塚の研究」pp. 43-47、岩波書店、東京。
清野謙次・宮本博人 1926 津雲貝塚人骨の人類学的研究。第2部 頭蓋骨、人類誌 41：151-208。
清野謙次・平井 隆 1928a 津雲貝塚人骨の人類学的研究。第3部 上肢骨の研究、人類誌 43、附録：177-301。
清野謙次・平井 隆 1928b 津雲貝塚人骨の人類学的研究。第4部 下肢骨の研究、其・大腿骨、膝蓋骨、脛骨及腓骨に就いて、人類誌 43、附録：303-390。
宮本博人 1924 現代日本人人骨の人類学的研究。第1部 頭蓋骨の研究、人類誌 39：307-451。
宮本博人 1925 現代日本人人骨の人類学的研究。第2部 上肢骨の研究、人類誌 40：219-305。
内藤芳篤 1968 岩下人の特徴、麻生優編「岩下洞穴の発掘記録」pp. 204-206、中央公論美術出版、東京。
小片 保 1977 旧石器・縄文時代の人類、日本第四紀学会編「日本の第四紀研究」pp. 245-260、東京大学出版会、東京。

第2節 大橋貝塚出土の獣骨について

京都大学理学部地質学鉱物学教室
石 田 克

大橋貝塚出土の獣骨片のなかでは、シカおよびイノシシが最も多い。以下、層別に獣骨の種類とそれぞれの点数を記載する。

第1貝層上面：タヌキ1（上顎骨）、テン1（下顎左第3小白歯）、シカ9（角3、下顎右第2切歯、左上腕骨、右桡骨、右踵骨、基節骨、末節骨）、イノシシ13（右側頭骨、上顎右第1切歯、第1大白歯、左第1切歯、第3大白歯、下顎右第4小白歯、左第2切歯、上腕骨、左踵骨、右距骨2、基節骨、末節骨）。この他、魚骨数点。

第1貝層：イヌ2（右尺骨、左大腿骨）、アナグマ1（下顎骨）、シカ23（右角座、角4、上顎右第1大白歯、左第3大白歯、右下顎骨、胸椎、左肩甲骨、右上腕骨2、左右桡骨、左大腿骨、左右脛骨、左踵骨、左右距骨、左中足骨、基節骨2）、イノシシ14（上顎左右の第1、第2切歯、下顎左右の第1、第2切歯、犬歯破片、左肩甲骨、左右上腕骨、左尺骨、左腸骨、右恥骨）、魚骨数点。

埋葬人骨周辺：アナグマ2（左右下顎骨）、シカ1（左桡骨）、イノシシ1（下顎右犬歯）。

第2貝層：シカ1（右中足骨）、イノシシ2（下顎左第1切歯、右距骨）。

貝層下砂骨：イヌ1（下顎骨）、シカ4（角4）。



1. 遺跡遠景 (北から)



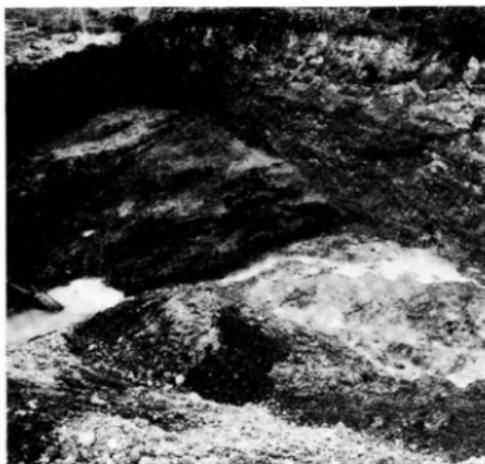
2. 遺跡遠景 (南から)



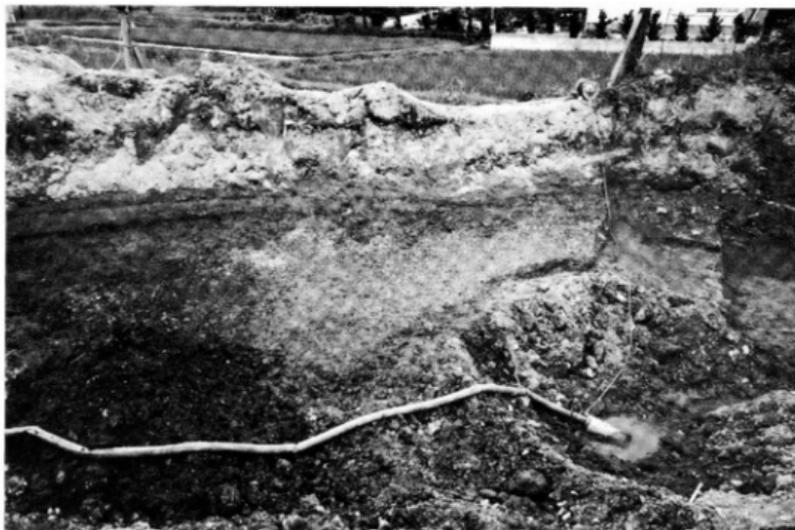
1. 微高地端部検出状況（北東から）



2. トレンチ全景（北から）



3. 微高地端部（貝層除去後）（北東から）



1. 貝層検出状況（東から）



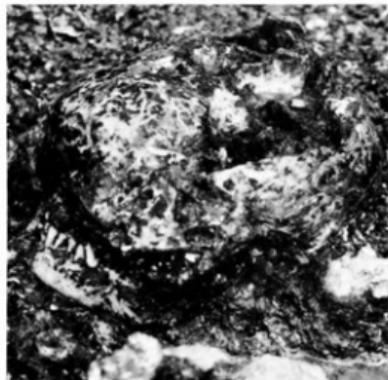
2. 微高地断面土層（東から）



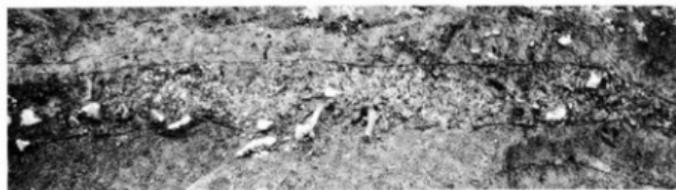
1. 人骨検出状況（北から）



2. 人骨上半身（東から）



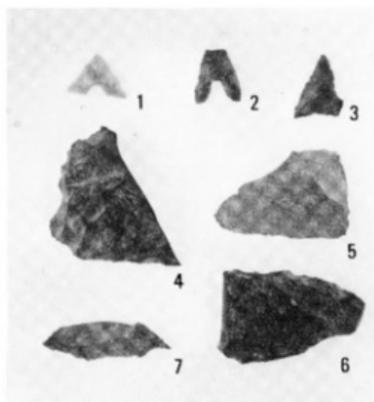
3. 人骨頭部（北から）



4. 人骨出土地点周辺土層（東から）

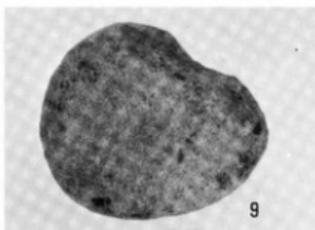
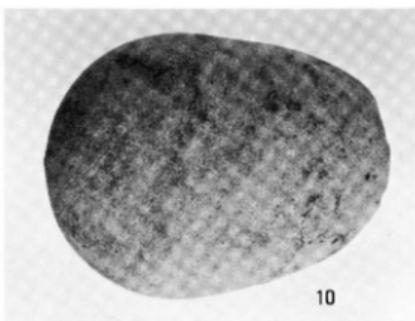


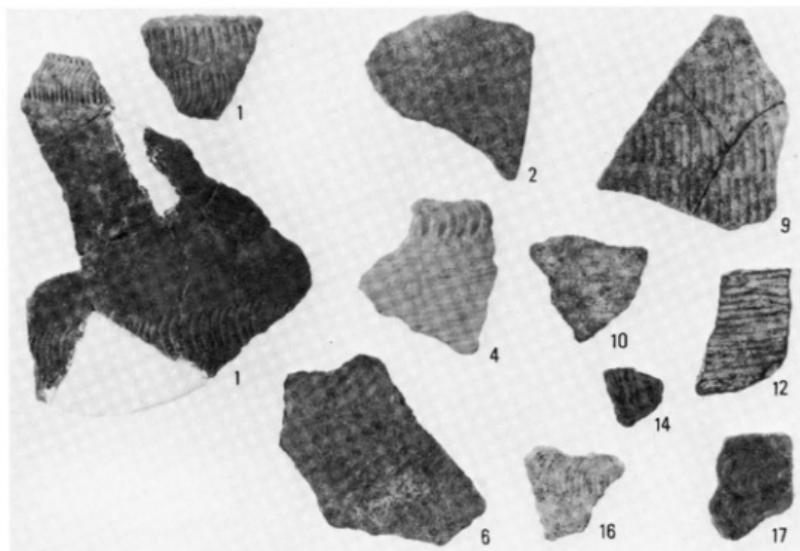
1. 発掘調査作業風景 (南東から)



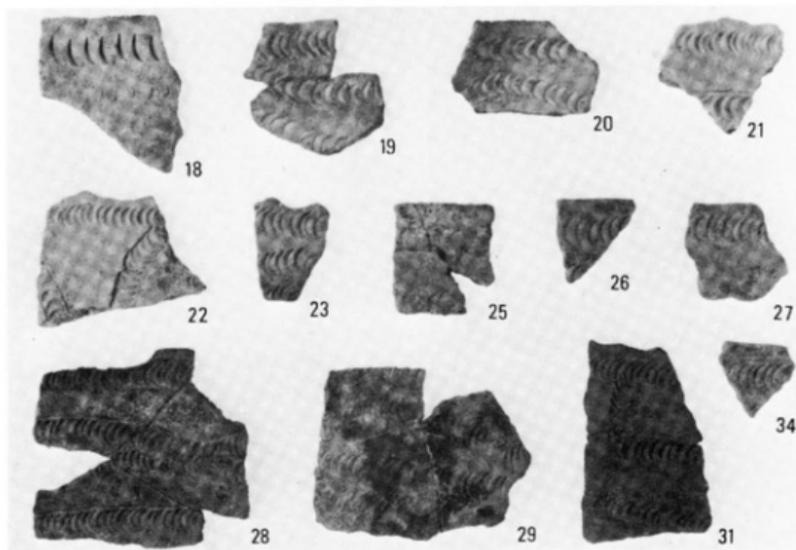
2. 出土遺物 石器

- 1~3 石 鏃
 4~7 削 器
 9-10 叩石・凹石

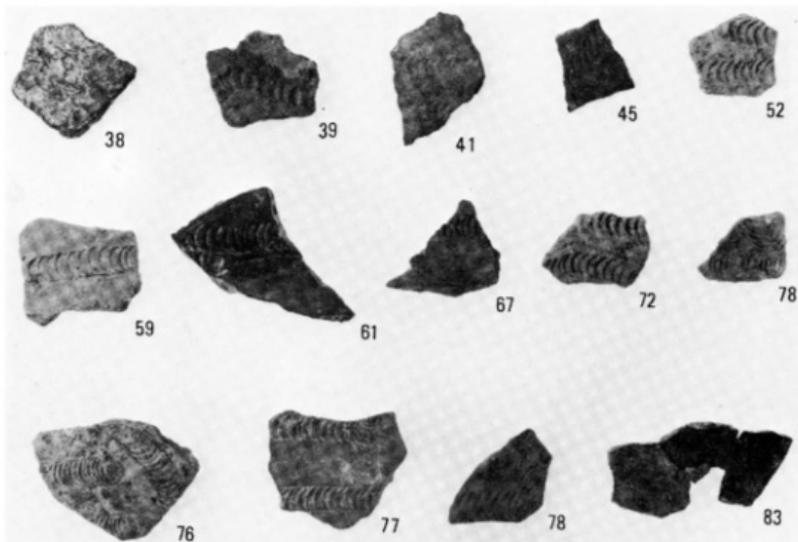




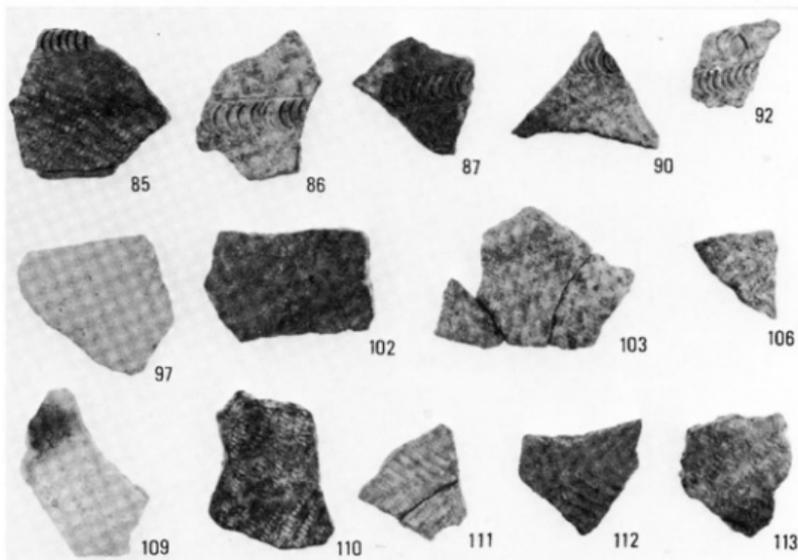
1. 出土遺物 貝層下砂層出土土器



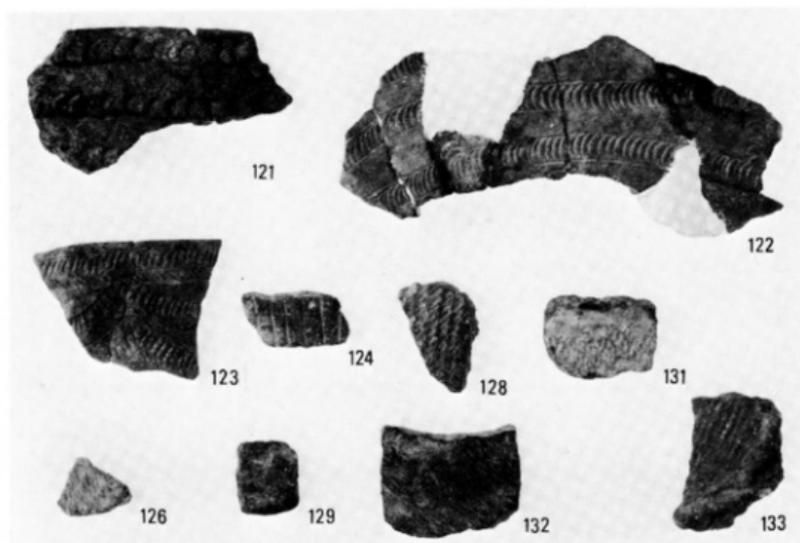
2. 出土遺物 貝層出土土器



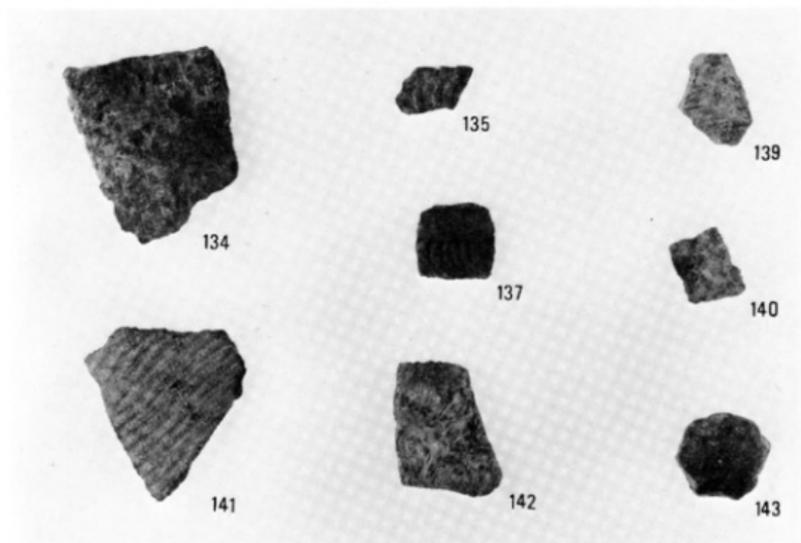
1. 出土遺物 貝層出土土器



2. 出土遺物 貝層出土土器



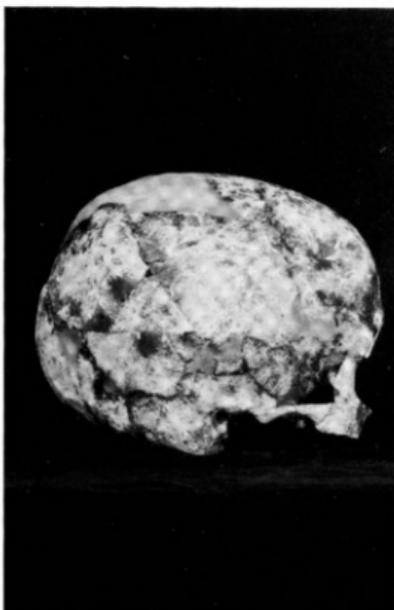
1. 出土遺物 貝層出土土器



2. 出土遺物 人骨周辺出土土器



1. 頭蓋骨前面觀



2. 頭蓋骨側面觀



3. 下顎骨前面觀



4. 下顎骨上面觀



1. 大腿骨 (左上)
2. 上腕骨 (左下)
3. 胫骨 (前面) (右上)
4. 胫骨 (右中)
5. 桡骨·尺骨 (右下)

岡山県邑久郡邑久町

大橋貝塚発掘調査報告書

—長谷川県営砂防工事に伴う調査—

昭和54年3月20日 印刷

昭和54年3月30日 発行

編集 岡山県教育委員会

発行 邑久町教育委員会

